

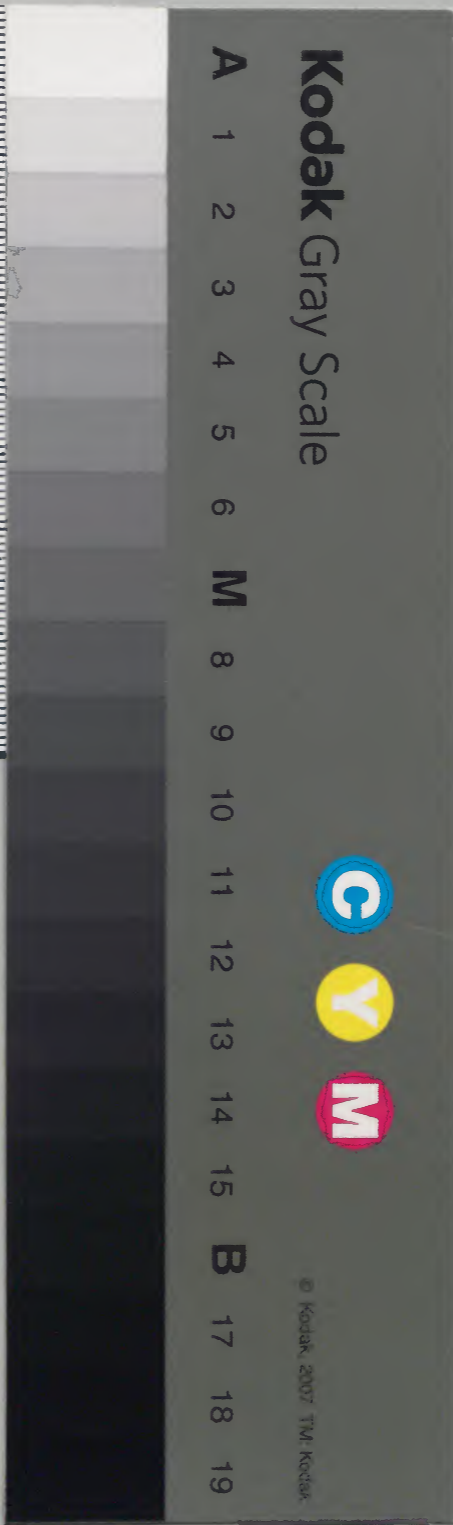
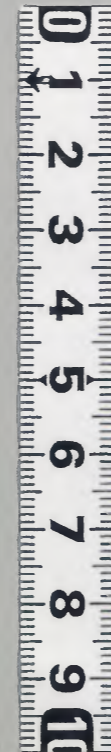
太界古易傳

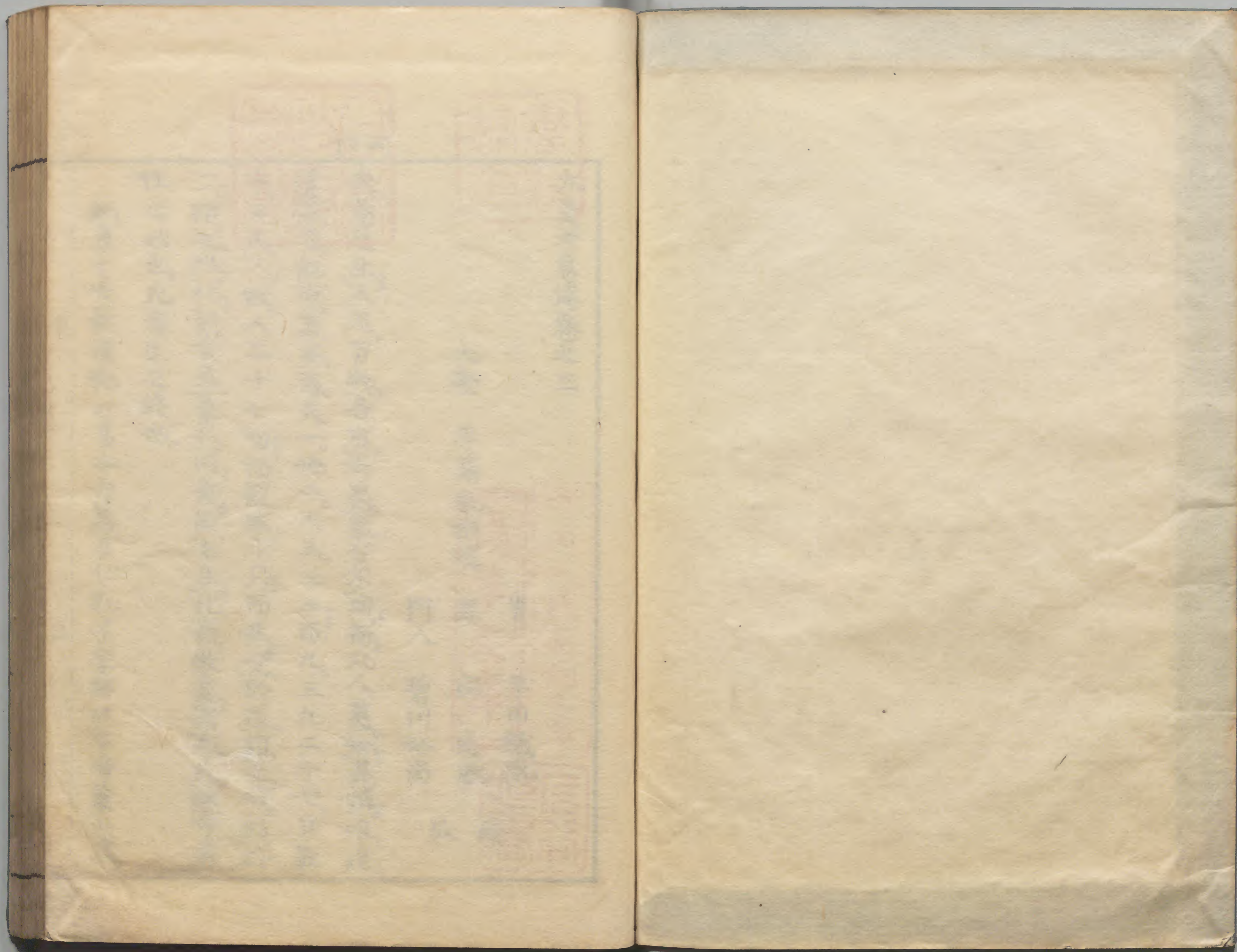
三

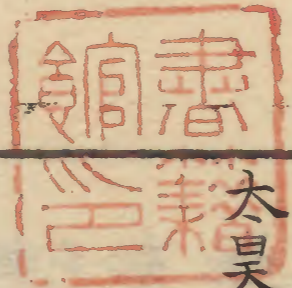
			一六六九八	和書門
	一七四	八	七	
四册	架	函	號	類

庫	文	閣	内
一六六九八	和		
四册	書		
七架	類		

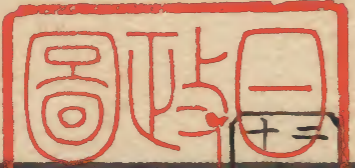
内閣文庫	
番號	和 16698
冊數	4 (3)
函號	194 5







太皇古易傳卷之三



夫易之生人及万物各有奇偶氣分不同而凡人莫知其情唯達
道德者能原其本焉天一地二人三三三而九三九二十七日數
主入故人二十七旬而體成十月而生分於道謂之命形於

一謂之性化於舍易象形而發謂之生化窮數盡謂之死故命者
性之始也死者生之終也。

此章在大戴禮記易本命篇及孔子家語本命篇小其

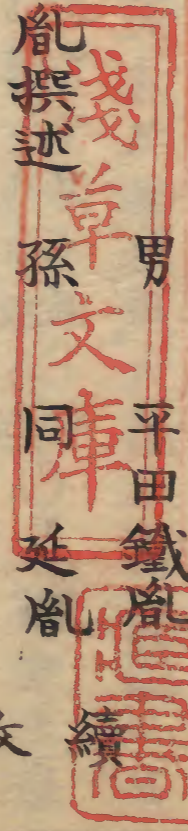
大聲

平篤胤撰述

門人 碧川好尚

攷

町田久成獻納之章



師老聃の説を聞ある由ある載せるま。三九二十七也云々
下を訂正して採り。但し是より下の馬を十二月のしる
て六月虎を七月諸蟲を八日あるして生むる事。これ九數の
係る由をし。及び種々の物の命性を語る説有ま。今此
要る非おまむ抄し出む。斯る今採る。説は淮南子の分
も見え。色は。其字も校合して文を其宜しむ。從り。分
於道と云々。下を。大戴礼を子曰と云む。家語を哀公
問於孔子曰。人之命與性何謂也。孔子對曰。有命有性取之。
文を是あり。其宜しむ。從む。載せ。成壯老あり行く
趣。始免。易の命數の係る事ども。種々云。○是謂ゆる易
不説有ま。今此急の非おまむ。其を漏し。○是謂ゆる易
大戴禮の盧辨が註。混元之始是曰大易。二象之所資。万
品之所生。禮運云。夫礼必本於太一。分而為天地。易云。易有大

極。是生兩儀。礼易之説雖殊而會歸一と云々如く。尚加於繫
辭。天地之大徳曰生。生謂之易と有依易道を云々
也。然る氣分不同と云々。其文義を。其易道の人及び万物
字生とある。各々奇偶の命數あるが故。氣分同あり。交
異類の生を分。故由あり。家語の王肅が註。易主天地以生
る如く。易道の分。各々。各々。本命。○而人々と云々。能原其
本。焉と云々。此の文義を。人及び万物。然る定數の本命有
れども。凡人を其情態の差別を得知らば。唯道德を達する
聖人の員能く其本を原。能知ると云々。是も盧辨が註
智通於大道。應化而不露。能測。○天上。地上。人三也。淮南子の
万品之情也。と云々。が如し。

○

三

高誘註。一、易也。二、會也。人生於天地之間。故曰三也。と云、依
外也。諸家の説有る者も無し。案ふ。天を第一の成る故
の。天一の數と定ゆ。地を第
二の成るし故の。地二の數と定ゆ。人を天地既の成り
る第三の成るし故の。人三の數と定ゆ。と所聞あり。○
好尚云ふ三々而九。と云、より十月而生。といふ迄二十八字
の文字始免を三々而九。九々八十一。一主日。日數十。日主火。
故人十月而生。と造らきて。注解をも為らきてより。今其旧注
の依の記せる事。前卷のも既の謂するが如し。○三々而九。
九々八十一。人三の數を重ゆて成る。數あり。其を三々
九々然る物の也。其九々より三の爲れた。三九二十七ある
を。其二十七を三々重ゆて。八十一なり。然れども。三

二十七。八十一也。と言及の非ざむ。三々九々成る易
數に極ゆる九々重ゆて。九々八十一と云、依なり。案ふ。人三を
り起る。數の重る。必は三を重ゆて數を
極め。依る有ゆ。しき道理あり。と論む。○はる一主日
と云、大戴禮の註云、依如く。太一の容算を主ふ數に如く。
八十一は八十去る餘を取。日を天神に尊ぶして固
より此數を當るが故云、依く言む。家語の王肅が註。一主
奇數也と云、るも其
大旨を違ふ事なし。○日、數十とは。大戴禮及ぶ家語に註る
從甲至癸也。と云、依如く。十干を一旬十日に名し。説、依者
の也。故云、依く言ふ也。五行太義。周書云、人感十而生。天、五
行、爲、五、藏、故、易、曰、在天、成、象、在地、成、形、者、也、と云、ふ、を、信、然、る、言、なり。故、人、十、月、而、生、と、云、日

○

三三

人を主りて。日數十なるか故尔。其數字承て受胎より十
月のして生る由なり。此由ある本書ども載せし條は
も合せ考す。○日主人とは。天日純易のして。易象は於て
乾より。人万類の中尔貴とあるか故尔。日主る物也為
るなり。其本書小月主馬、牛、主狗、時主豕、音主狼、然もど
右に本文に趣了從む。其隨小釋する説小ある有也。猶深
く實事を徴し攷ふる小。此語をし孔子に。古説を傳りし語
尔も有也。九し八十一と云々以下に其説迂遠小聞ゆ也
也。其本に古説あらむも。其説早く乱れし故。後人に添加
せる説もやと思ふ由あり。惣じて此文にみゆるは。彼国の古書ども尔。本に古説なるも中

後人の説の交るが甚多く。今計ふる小暇あり。其下條に引く老子に語小。人
受天地變化而生。一月而膏。二月而脉。三月而胚。四月而胎。五
月而筋。六月而骨。七月而成。八月而動。九月而躁。十月而生と
あり。今是を考ふ所小。一月而膏と云ふは。胎を受る始免膏
の如き云ふなり。是を姑く其月の朔日と爲し。九月而躁
と云ふは。胎已ふ成畢する。生出る構へある時云ふ也。
之を姑く其月の晦日と爲む小。全九月尔。三九二百七十
日なり。然もとも月尔大小有也。九月尔也。其日數小四
五日足らぬ。必也十月の數小係る故小。十月而生と云ふは。
春秋繁露に。天之大數畢於十旬。旬、天地之間十而畢舉。旬、生
長之功十而畢成。十者天數之所止也。古之聖人因天數之所

○

○四

象也。凡^レ人稟^ル於^レ木則象^ス之^ニ以^テ仁^ヲ受^ケ於^レ金則以^テ義^ヲ孔子曰。天命之
謂^レ性。性者資^ル於^レ未生之前。養^ル於^レ既生之後。原^ル其所^レ故^ニ於^レ此言^フ之
と有^ルと^レ是^レあり^キ委^レの^レら^ニ交^ル也。然^レを^レ彼^ノ孔^ノ廣^ノ森^ノが^レ補^シ註^ス小^ノ董^ノ仲
也^ト云^フ依^ルの^レ之^レ難^クあ^リく^テ其^ノ餘^ヲ取^ル然^ルる^ト此^ノ一^ノ句^ノ實^カも本
性^ノ原^ノ故^ヲ示^セる^ノ説^ハあ^リき^ニ也^ト。五行^ヲを^レ引^キ出^スる^ノ註^ハも然^ル事
れ^ニが^リ。形^ニ於^テ一^トと云^フ一^ト。五行^ノ中^ノ一^ノ行^ヲ云^フる^ノ非^ニ交^ル。
か^レ竊^ク兮^ク冥^クと^ル精^ニ真^ノ元^ノ氣^ノ分^リと^シ。上^ノ文^ニ謂^フ也^ト命^ヲ指^シ
して一^トと稱^スせ^リ。其^ノ下^ノ文^ニ命^者性^之始^也と有^ル文^ニ相
照^シして辨^スふ^ニ也^ト。抑^レ人^ノの^レ精^ニ神^ノ本^ノ命^ニと^シ太^極易^ノ咸^ノの^レ元^ノ氣^ヲ
と云^フ語^ヲ。老子^ノ道^ノ生^一と云^フひ^レ列^子及^ビ乾^鑿度^ノ命^ノ
易^變而^為一^下と有^ルる^ノ相^辯む^ル故^ニ人^ノ取^リと^ル本^ノ命^ヤカ

一^ノ形^ヲる^カ故^ニ小^ノ加^ク云^フる^ニ。文^ニ義^ヲ然^レき^ニ本^ノ文^ニ義^ヲ。我^ノ人
と^ル其^ノ體^ヲを^レ成^ス時^ニ。五^ノ行^ニ質^ヲ稟^ルも^レ彼^ノ本^ノ命^ニ謂^フ
由^ル一^ヲを^レ得^ルる^ノ限^ニ也^ト。五^ノ常^ニ性^ト形^ヲさ^スる^ノ也^ト。其^ノ真^ノ一^ノ入^リ
り^テ始^メて^レ心^ニ性^ト成^ル義^ハなり^ニ。是^ヲ以^テ彼^ノ中^ノ庸^ニ。天^ノ命^之
謂^フ性^トと^レ言^フへ^リ。其^ノ大^ニ性^も天^ノ命^ニ德^ニ資^リと^ル性^ノ故^ニ也^ト
也^ト。中^ノ庸^ニ文^ニと^シ見^ル。天^ノ命^ヲ直^ニ性^ト謂^フ云^フる^ノ如^ク
天^ノ命^ノ頼^リて^レ成^ル故^ニ也^ト。大^ニ凡^ノ化^於會^易象^形而^發謂^フ
之^ヲ生^ス。盧^ノ辨^ガ註^ス。象^ニ微^ニ昧^ニ。易^曰。男^女構^精萬^物化^生也^ト言^フ
依^ル如^ク。父^母構^會小^ノ變^化して^レ身^體の^レ象^形あり^ニ。而^シて^レ胎
内^ニ發^出る^ノ。化^生と云^フ由^ル也^ト。精^神性^命之^レ化^生時^ニ小^ノ定

○

〇七

ある事なり。韻會小説文。生進也。象州木。生出土上。徐曰。去者
産也。詩曰。既生。其文子。老子曰。人受天地变化而生。一月
既育と云ふ。而膏二月而脉云々。形體以成。五藏乃形と有る。知居。南
子。此精神訓。此語を載せる。二月而脉。三月而胎。四
四月而肌と有り。餘を上のも引ある。文子と同文なり。此
て。此章。此分於道。謂之命。形於一。謂之性。化於含易象形。而衆
謂之生とある。文面の是也。人生の本。然象形。彼道小
分。至本命降。其分一。形は。性成。含易の交會
小資り。始。象形有。と云。如く聞。其本未
た。然。然。は實微。之を言。母胎。固
其。種子有。活動。機。無。自然。男女。分定。ゆる

此謂也。構精の時。天分靈を父より傳。母胎。種
子。授。是謂也。一元。氣。性。命。本。母胎。固
あり。元。自然。男女。分定。事。窮理の学。子
知。人。誰。辨。事。草木の。生。さ
る。前。既。男女。分。一。斯。其。一。感。五。常
理。事。思。合。一。斯。其。一。感。五。常
此。性。始。形。漸。象。形。成。二十。七。旬
老子。謂。膏。如。女。躁。至。象。形。已。成。畢。王。て
後。十。月。數。調。生。後。之。觀。彼。分
道。受。門。戸。顯。然。王。此。命。門。也。神。關。も。稱。也。即
也。臍。形。又。靈。命。の。至。留。處。受。命。之。官。と。も
靈。根。と。も。云。是。身。體。中。極。の。し。也。真。易。真。會。是。起。王。

諸藏此官能を更なり。謂ゆる貞一。是は小頼也。三才立
於此。我か神祇令鎮魂祭此義解。招離遊之運魂。鎮身體
之中府。故曰鎮魂。とある。中府は即ち此靈根受命之
官云云。夢分流と云ふ。即ち胎中神關是なり。何を以て云ふを父
焦之府と云ふ。即ち胎内小宿る始め。胎中の受け留るる丈なり
此一滴水。母れ胎内小宿る始め。胎中の受け留るる丈なり
日重初月を積みる人と與る。天一水を生流とは是なり。胎
を即ち一身此括と云ふ。設今を袋此口を括るか如し。此故の神
關とも三焦此府とも号して此所の動脈小なる病の善惡生
死は知ると四此脈の證は最も秘を爲しと云ふ。張介
賓が求正録も相類する説有れど斯は如くを允當なり
と。猶次條小云。老子黃庭經。上有黃庭下關元。後有幽關前
命門。呼吸廬間入丹田。玉池清水灌靈根。審能修之可長存と
有る也。真一字守依法を誨ふる小就る。神真此秘説を淺せ
る也。素靈此書小も靈根此説なり。胎を命門と云ふ説も

有る也無れ也。人普為くを得知さ依事なりと。成学小志さ
む人。常思ふ念き事ある。黄庭とて胎上なる上中下腕
處の名なりと。右此文あるを胎下字弘く指せり。幽關とて
兩腎を云ふ。命門とて腎脈腰部の穴名有り也。此小なる
胎を云ふ。廬間と鼻丹田は胎下氣海此穴迎の腹内。玉池と
口。清水と唾。靈根と胎底の腹内。謂ゆる中府受命之官小也。
真易真含元氣精神此本處なり。上小述るが如し。○化窮
し。此を皆玄家此古書とも小依て云ふ説なり。○化窮
數盡謂之。死と云。廬辨が註小。化窮者身也。數盡者年也と云
亦如く。身體の化窮也。性命此數尽あるも死と謂ふ由なり。
字書とも小。窮者極也。竟也。究也。形と見え。死を礼記此註疏
る。死漸也。言若氷秋漸然而尽也。精神一去身名俱尽。故曰死
とあり。古て貴賤を論せ死と云ふ。庶人。○故命者性之始
也。死者生之終也。太戴礼記。故命者性之終也と云。有

也。然きど其は文に落多るなり。故今大冢語の依りて載せ
る孔子此言のり。由冥字説さる常の語氣の相似さる
案予を哀公と云むした。孔子此六十字越多し頃此公
也。然きを此を 歳にして老子此門道に分て始め
の入あるを此を後の語のり。と著し。 命あり。命は資して性形はる。故小命者性之始と云む。命
 定備して衆生し。其化窮て其數尽る死ふ至る。故小死者生
 之終也と言予也。本書と此下ふれ不道衆生して男女性
道あり。女を自然のり。男を自然のり。男女性
の別論は此。抑入は定命はも。天皇祖神の爲と無して
 為賜ふ。易威五運は旋機の資也。人々各々小自然に如く
 禀得る道あり。其中小謂ゆる遭隨の二命あり。且先世に報

應小も係也。造化主宰は冥慮のも得任せ給は妙事と。古人
 も既の論するが如し。其は説文解字に命字の徐錯が通論
也と云るも思ふが如し。遭隨二命及び先世報應
 の事也。鬼神新論の委く論ふが就て見るべし。

八卦之序成立。而五氣變形。故人生而應八卦之體。得五氣以為五常。仁義禮智信是也。道興於仁。立於禮。理於義。定於信。成於智。五者道德之分。天人之際也。聖人所以通天意。理人倫。而明至道也。

此條及び次條也。乾鑿度云。孔子曰と有之。人之此謂也。本命本性を知定むる古説は傳ふを採き也。○八卦之序成立と云。彼太一及び斗柄の旋退に依りて。八節の候八卦の氣自然の四正四維の錯在して。天地定位。章は如く成立せるを言む。○而五氣變形と云。八卦の序志り成立せるに賴りて。五行の氣あひ交互する事を得て。人及び万物の形

○

○上

を変化し出る云ふ。此は上は二條の謂する説と故に人
 生而應八卦之體也。五氣は人及び万物の形を變化し出
 ず事を得る也。全く八卦の序は成立せるの資する事なる故
 也。人生れて而して其年小生する卦は體を應ずる由小
 也。是やがて本命本卦は定海する所なり。同じ乾鑿度の伏羲
八卦、質者無文、以天言、此易之意、夫八卦之變象咸在人、と云
象も八卦の體小應じて生るる人なり。故小人の咸く其變
象を備ふると云る意なり。○得五氣以為五常。仁義礼智信是
 也。上は五氣變形と有る也。五行は質を結びて。形體を成
 せ義あるが。以為五常と有る也。其五行は性小因する。五常は本
 性は具はる由なり。此、五は五常と号する由なり。五行大義小
行之終久恒不可閱。故名為常。亦云五德。

以は此常行能成其德。故云五
德也。と云は字を取捨きなり。○或人問ふ。此條は人生應八卦
 之體と有る也。又これ本命卦を定むる古説なりと云ふ也。
 前章小分道を以て本命と稱せるは違ふ也。心得かこし。
 且も此八卦は躰を應じて本命卦の定海する式をいふ。答
 ふ。前章小謂ゆる本命は生前は本命。今云ふ本命は生涯の
 本命なり。彼此とも本命と稱するは難なく。彼此共小あ
 り通じて心得ある有海じき物なり。其は海於生年は玉卦
 小應じて。本命は定海式を言む。既云ふ如く。八卦
 と十二支固より相離れず。道理ある也。太歳星は卯小在
 ず年は生きた乾命。辰己小在る年は生きた兌命。午小在る

年此生れ大壽命。未申小在る年此生れ大震命。酉小在る年
此生れ大坤命。戌亥小在る年此生れ大艮命。子小在る年此
生れ大坎命。丑寅小在る年此生れ大巽命。此大生年此
各支字以て本命支と称する如く。更小異論小涉ら然定式
也。世小有ぬる和漢此易書類。人一代本卦之事と云
午年小生る人小在る本卦と定免。未申小生る人
大坤。酉年此生れ大兌。戌亥年の生れ大乾。子年此生れ大坎。
丑寅年の生れ大艮。卯年の生れ大震。辰巳年の生れ大巽。此
定ある由を載せり。此大加此擬方位なるを惡く。本大
古易注疏るを周易ありし後小例の如く其方位小改め替
ある定れ此大諸越此み小非交。皇朝小も早く用む給り。
其大仁明天皇紀了。兼和十年七月辛丑。議定。奏曰。本命之日
不孝凶事。延喜。会易寮式小。御本命祭式あり。拾芥抄小。本命

且有二種或以生年為本命。或以生日為本命。檢國史。寅年降
誕以寅為本命也。保憲說也。何と有るを知らず。但し此抄
く兩端れをど。後鳥羽院御記小。建保二年四月六日庚子。依
為本命。且今精進給とあり。此天皇此御降誕大。治承四年庚
子此を御生年。本命日と称す。故実形るを明ぬり。
然と彼生日此干を本性小立不故実も有るを。生日をも
本命と云む。准あく。古を建曆御記小。御
本命日。必可有御精進也。記させ給り。

○再問ふ。延喜の会易寮式小。御本命祭。神座二十五前と
有る也。其祭料此品を載さむ。毎年六度祭之と所見
也。今謂ゆる本命卦此神を祭に給ふ事ぬる。然も有
らむ神座二十五前と云ふと心得か。答ふ。此大八卦
神此祭る非交。本命屬星と云ふ此斗此星神の御祭ぬり。卦

の神は八史と号けて、諸越の書等小を、其を祭る式をも
記せりと、皇朝小を、祭に給るるものと、未見當らる、
西官記、北山抄、江次第れと、天皇元日は屬星を拜し給
ふと有るも、即是の、其本據を五行大義に、北斗有七星、
第一至四為魁、第五至七為杓、合有七也、春秋合誠圖云、斗
第一星名樞、二名璇、三名璣、四名權、五名衡、六名開、易七名、
標光、黃帝斗圖云、一名貪狼、子生人所屬、二名巨門、丑亥生
人所屬、三名祿存、寅戌生人所屬、四名文曲、卯酉生人所屬、五
名廉貞、辰申生人所屬、六名武曲、己未生人所屬、七名破軍
午生人所屬、あは七星の各とも、合誠圖の、有の、後れ
る古名と聞ゆ、ま、黃帝斗圖の、各とも、
星の善惡の依り、後れ、物と見え、後、世、
れど、和漢の旧く用むるは、此各共なり、樞下の各は

見ゆ、書等及び、玄家の書等も、異名多、適甲經云、第一
のまど、其を、總て取用する、不足らる、
水、二、水土、三、木土、四、金木、五、金土、六、火土、七、火、所以、子午各
獨、屬、一、辰、其餘、並、兩、辰、共、屬、者、子午、為、天、地、之、經、第、一、第、七、
兩、星、亦、是、斗、星、之、經、建、所、用、指、也、自、餘、非、所、指、者、故、並、兩、屬、
故、六、十、甲、子、從、第、一、起、甲、子、以、配、之、往、還、周、旋、其、數、矣、
七、星、の、配、す、る、五、行、を、別、義、の、非、交、其、所、屬、の、十、二、支、を、
配、屬、し、來、る、物、の、子、午、は、天、地、の、經、の、事、也、次、條、の、
云、ふ、は、見、よ、孔子、元、辰、經、春、秋、仇、助、期、を、引、交、る、七、星、
を、知、べ、し、竝、是、人、年、命、之、所、屬、恒、思、誦、之、以、求、福、也、と、有、る、是、の、
同、書、小、北、斗、領、二十八、宿、一、星、主、四、時、魁、起、星、剛、起、角、以、次
分、屬、若、人、行、年、至、室、而、五、星、行、到、此、宿、者、隨、星、吉、凶、也、
春、秋、運、斗、樞、を、引、交、る、十、二、屬、並、是、斗、星、之、氣、散、而、為、人、之、
命、係、於、北、斗、是、故、用、以、為、屬、皆、上、應、天、星、下、屬、年、命、也、
○ 十一

云此七次條の論深き由緒あり。人此本命及び年命
の係り。朝廷のも然ばより重し御祭に給ふ事なり。を
信用むむ難無きと。此等此説等の外。後世ある紛々
ある説あり。多く妖説妄説なり。一切の掃除して用ふ
流事勿れ。其七五行大義の今引出る説ども外
も足然る本命星の御祭あり。必ず此屬星の一神を祭
給ふ。或七星此神を皆祭り給ふ事と所思あり。
神座二十五前と云ふは甚く心得あり。此をある能
く考ふて定むべく。

十二支八卦固より密合して相離れざる道なり。生年此

支は本命の立る上。其生年此卦は本命卦あると。更
論れき事なり。彼分道もも本命と稱せざる違ふ事
思ふむ。實然る事なり。然る今此本文の人生而應八卦
之體と云ふ語は実事符むて動き無く。か其生時に建
せる斗星は本命星と稱し。その生日は干を本性の立依故
実も准る思ふ。分道の時此當卦有きと。人の生涯は
本命卦定むるは。其生年の主卦を取ると決る深
由ある事なり。然る世の有る易書類は。かく其本
稱する説は古式なり。然る其生日は前。二十七旬六節餘
は分道は日とは云ふと。或は節は替り依る。孰

此節ふ當きると云ふと決め難事あり。或て人ふくさる月足らむ生ゆきあり。或て月延ひて生ゆき有也。然き分道の時を以て生涯を消息判断する本卦を立ぐ。此道理ありし。然るを月足らむと思ふ。母は多血なり。故と思ふ。妊の以前より。經行有也。後小孕めり。其年主卦をも。分道の本命と稱する。追ひて。其節日まぶる際や。小定ある事。古く無也。尚云は。其分道の年の主卦も。大寒と立春に交界ある。至りて。去年とや云ふ。今年とや云ふ。と定め難事も有也。然れば生年の卦を以て。本卦の立は事。儲めく古法を立する。古聖の遠く思ひ慮る法なり。べし。儲めく古法を立する。意を試す言は。天地神明の道。幽顯に別あり。其參する人ふし有也。我人の上も。自然の幽顯あり。其

我も人も。其もと幽入り出て幽小入れ也。幽世を我等が本世ぬる。暫く寓ふ出くる顯世ある故。母は胎内ふ在りし間を幽世の。出胎より後を顯世ぬる。其生涯と云ふも。世小在る間云ふ也。一世の本命を。生年の當卦を。之を消息と云ふ道理なり。然き此由を以て定げむも亦知らる。但し我人の本世を幽世。今は顯世を寓せぬる。事由也。世の古学者流れど。曾も知らず。絶る所なき。説ぬる。今かくしも云ふ。深く考得ある所あり。云ふ説なり。其は別委論する物あり。然きと其分道の當卦も。大凡そ此頃を云ふ事。知らず有る。非さむ。今其生年の當卦。及び節卦の王相を知しむる因。分道の節をも合せ図する。古也。尤也。とし。

八卦八運分道發生圖

坎 艮 坤 震 巽 兌 乾 巽

冬至	立冬	秋分	立秋	夏至	立夏	春分	立春
大寒	小雪	霜降	白露	大暑	芒種	穀雨	雨水
小寒	大雪	寒露	處暑	小暑	小滿	清明	驚蟄
生癸	生癸					道分	道分
					道分		
				道分			
		道分					
	道分						
道分							
相胎	胎沒	沒死	死囚	囚廢	廢休	休王	王相
胎沒	沒死	死囚	囚廢	廢休	休王	王相	相胎
沒死	死囚	囚廢	廢休	休王	王相	相胎	胎沒
死囚	囚廢	廢休	休王	王相	相胎	胎沒	沒死
囚廢	廢休	休王	王相	相胎	胎沒	沒死	死囚
廢休	休王	王相	相胎	胎沒	沒死	死囚	囚廢
休王	王相	相胎	胎沒	沒死	死囚	囚廢	廢休
王相	相胎	胎沒	沒死	死囚	囚廢	廢休	休王

巽 乾 兌 震 坤 艮 坎
 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥
 子

坤 震 巽 兌 乾 巽

秋分	立秋	夏至	立夏	春分	立春
寒露	白露	大暑	芒種	清明	雨水
霜降	處暑	小暑	小滿	穀雨	驚蟄
					生癸
				生癸	
			生癸		
		生癸			
	生癸				
生癸					
沒死	死囚	囚廢	廢休	休王	王相
死囚	囚廢	廢休	休王	王相	相胎
囚廢	廢休	休王	王相	相胎	胎沒
廢休	休王	王相	相胎	胎沒	沒死
休王	王相	相胎	胎沒	沒死	死囚
王相	相胎	胎沒	沒死	死囚	囚廢
相胎	胎沒	沒死	死囚	囚廢	廢休

右八卦の八運を年々此八節の係るべきは図に如くあり。人物とも此年節の發生をる。此八運を具し分得たる事なるが。其推法の一例を云む。余はも。安永五丙申年此八月二十四日。癸亥日申下刻の發生せる。此日丑四刻

九月霜降の節に入しうば。今曆ふた。秋分壬辰より三十
二日めぬまに。九星を天芮、日
小て。時を天蓬なり。はて甲寅旬に
るが。癸亥、日天藏申、時を天獄なり。本命卦に震を然る物に
る。其、休運の當るを。是より二百七十日推上をぬむ。前年閏
十一月に二十日。小寒節に入る。五日の頃に分道と推
とど。右に論する由らし有まむ。大凡ふ其前頃と知るが如
し。然るを右の圖ある發生の節運のみを、少くは胡亂も無
く著明ふ知るまども、分道の事小於るを、唯るは、大凡ふ
思ふは、ありの設。儲。悔。此は心得る事あり。其を子、年、に
けと知るべし。儲。悔。此は心得る事あり。其を子、年、に
生むは、坎命。戊亥、年、に生むは、艮命。此論む無まど。歳小
らりて正月の至まども。尚。大寒の節残る。立春の遅る年
あり。然る年、に立春前の發生せふを。譬を、子、年、に子、歳、るま

やも。尚。前年、に亥、年、艮命、に人、なり。悔。或は十二月に内ふ。
早く來年、に立春、に至る年、あり。其、立春、に至る後、の發生
せるを。譬を、子、年、に子、年、なりとも。來年、に丑、年、巽命、の人、に
也。其餘、に本命卦も此、に推する知るべし。其、大節、季、に來、歴
也。天地の自然、に從ふ。月、に定め、人、為、に、出、る、事、も、ま、む
あり。然るを人の親ありむ者。子、を、生、む、を、速、に、其、年、月
日時を詳し記し、残るを、事、の、ま、む、其、を、其、子、成、人、し
て、後、の、物、に、心、ある、を、必、を、其、日、時、も、知、ぬ、む、し、く、思、ふ、ま
む、有、る、物、に、心、あり、世、に、胎、帯、に、落、る、時、に、出、生、に、年、月、日、時、を
そ、れ、包、紙、に、記、し、て、其、子、に、遺、し、傳、ふ、る、事、ある、を、最、善、き、風
俗、あり、と、中、ふ、親、の、親、に、道、を、知、ら、む、然、る、事、も、為、ま、む、
か、有、り、と、見、え、る、唯、を、生、年、の、み、ま、知、る、を、月、日、時、を、
を、知、ら、む、人、も、多、く、有、る、を、皆、親、に、人、に、過、ぬ、を、有、る、を、
然、る、道、興、於、仁、の、道、と、ま、む。か、易、威、大、極、を、始、る、生、に、ま、む、道

ある。東方木徳の仁も興す。南方火徳の礼も立ち。西方金徳の義も理免。北方水徳の智も成す。中央土徳の信も定まる。由る。此は易道の萬物に生るる有る趣を云ふ語なり。人そは易道五行の資にて生出る物れを也。其徳行を脩する。木徳の仁も其志も興し。火徳の礼も其志も立ち。金徳の義も其志を理し。水徳の智も其志も成し。土徳の信も其志を定むべし物ぞと言ふ意を合し。是を以て五者道徳之分。天人之際也と言ふ。然るに礼記の礼運の人は天行之秀気也。桓子新論の人は抱天地之體。懷純粹之精。有精之最矣也。人心者乃天地精群生之本也。れと云ふは始の古書とも。此類なる語いと。○聖人と云ふは以下は文意を五多めし。思む合をべし。

行八卦を然る止おと無き道理あるが故。是を觀察して天意も通じ。人倫を理して。至道を明し。教訓せる由れ也。然れは五常の目也。五行八卦の本也。民を教ふるも就る。伏羲氏の始也。設けある名も是。是を以て時を度りて宜し。此を制せる。謂ゆる易簡之道なり。藤維嶺の語に古学と称する。儒者なり。言の論語中なる孔子の語に仁字のの之説も。仁義を雙べ云ふ。孔子以後の語に仁字は常と云ふ。古書も無き。此は孔子以後の語に仁字は熟語ある説を。孔子以前の古書に仁字も強むる。其後其説と云ふ。見識高き事。次め。甚く泥める。偏見あり。其説長けを。此は著す。西籍概論の就る見るべし。○儲是は五常の五気。小因。小説。小就。小就。尚傳ふ。説あり。其は管家。易傳。受胎養生。沐冠臨王。衰病

死葬。謂之五行十二運。人生本命之所屬也。と有る。十二運小
て。其定説を

是なり。此唐六典小て五行十二氣と號けり。龜卜此
五兆合せり占ふ由多載せり。考牙合を及し。此
上は五運を尚委く區別せる古式小て。淮南子あり。京房易
傳れども所見あるが。俗小傳たる十二運の説を。此を託
する物なり。其定説を五行大義小詳小載せり。用ふ及し。

其大義ある説を五行體別生死之處不同。遍有十二月十二
辰而出。波木受氣於申。腹而養戌。生亥。沐浴子。冠帶丑。臨官寅
王卯。衰辰。病巳。死午。葬未。○火受氣於亥。胎子。養丑。生寅。沐浴
卯。冠帶辰。臨官巳。沐浴午。冠帶未。臨官申。王酉。衰戌。病亥。死子。葬丑。
○水受氣於巳。胎午。養未。生申。沐浴酉。冠帶戌。臨官亥。王子。衰
丑。病寅。死卯。葬辰。○土受氣於戌。胎丑。養寅。生卯。沐浴辰。冠帶巳。臨官
申。酉。胎戌。養亥。生子。沐浴丑。冠帶寅。臨官卯。王辰。衰病巳。死午。
葬未。○木受氣於亥。子。沐浴丑。冠帶寅。臨官卯。王辰。衰病巳。死午。
葬未。○未。土受氣於亥。子。沐浴丑。冠帶寅。臨官卯。王辰。衰病巳。死午。
沐浴未。冠帶申。臨官酉。王戌。衰病亥。死子。葬丑。○丑。土受氣於
巳。午。胎未。養申。生酉。沐浴戌。冠帶亥。臨官子。王丑。衰病寅。死卯。
葬辰。凡五行之王各七十二日。土居四季。未十八日。并七十二
日以明土有四方生。死不同也。五行皆以葬後之月。而受氣者。
以其死還復生。神氣不絕。故也。と有る。是なり。但し。此を今
て用ある文の抄出せむ。委く本書を見るべし。
小我が徒栗原信元。予と同じ意より上り。分道此章を取
る。此十二運の説と併せ。命性此本を考究して。一圖を作せ

抑命性^りを胎中^ニ定^ス也。生死は形象^ノ見^ル。命性^ノ幽
深^クして生死^ノ著明^ナ也。人^ノ生^ク五行^ノ發動^ノ感じ^テ
以^テ形^ヲ成^ス故^ニ生氣^ノ感^ズ有^リ也。壯氣^ノ感^ズ有^リ也。
衰氣^ノ感^ズ有^リ也。其^レ第^ニ序^ノ從^テ變^化窮^ニ無^ク也。
人^ノ稟^ル受^ル定^ス準^形也。然^レも人^ノ命^ル長^短有^リ也。其^レ感^ズ
む所^ニ生^壯老^死數^ル依^テ也。其^レ初^ニ稟^ル時^ニ定^ス有^リ物^レ
也。天地^ノ相^交り^テ万^物生^ジ也。男^女相^合む^テ子^ヲ生^ズ也。
と其^レ理^同也。是^レ以^テ水^ヲ易^ニ始^ル也。火^ヲ王^ニ
時^ニ胎^シ也。火^ヲ食^テ始^ル也。故^ニ水^ノ王^ス時^ニ胎^ス也。
木^ヲ水^ノ子^ナり故^ニ水^ニ生^ズ時^ニ受^ル氣^シ也。水^ニ死^ス時^ニ受^ル

王^也。如^ク是^レ也。分^道命^性也。氣候^ノ應^ズ也。疑^ニ也。
故^ニ草^木鳥^獸之^レ生^育分^道也。時^節違^テ也。草^木み^れ
華^実日^ヲ算^ズ也。知^ズ也。鳥^獸之^レ葉^落尾^落也。季^候有^リ也。
其^レ時^節之^レ年^ヲ也。華^実産^育有^リ也。事^變の^レ正^理非^也
之^レ故^ニ華^有也。其^レ實^有也。其^レ理^思ふ^{べき}事^有り
の^レ生^殺之^レ從^ル也。故^ニ也。深^ク也。理^思ふ^{べき}事^有り
人^ノ也。其^レ用^意也。有^リ也。播^種之^レ節^生育^也時^ノ
當^レ也。命^性正^シく長^壽壯^健也。草^木之^レ節^季應^ズ也。
るか如^ク也。其^レ節^衰也。時^ノ當^ズ也。命^性之^レ氣^ノ感^ズ
也。短^折性^弱也。時^ノ當^ズ也。華^実之^レ如^ク也。云^フ
也。信^ニ此^ノ説^也如^ク也。男^女之^レ播^種也。分^道之^レ時^生子^也本
命^定也。時^ノ當^ズ也。人^ノ之^レ父^母也。慎^ミ也。其^レ時^ノ當^ズ

らむを有るうらふ。抑あは構精の道をも。会易の皇祖産靈^{オホカミ}大神の。世の蒼生を蕃息せし免賜ふ。深に神慮を受給む。二靈大神^{ニオホカミ}の事始免賜むしむ。口授無して人及び万物も自然に如く傳はり。此道と飲食の事小於る。他欲小勝る。殊尔大欲存と云ばうり人の大く欲する事。生く此道なき産靈の本元なき。人よく殊小深く其性を稟得る故なり。然れを人のして産靈の神業をそは終る継行ふ。あと。唯^{モトモツシ}あは一道^{モトオホカミ}あり。最慎み最重に爲き道なるあと。是を以て知る。構精の時を慮らむを有る。しき事も是のを辨ふ。但し^{モトモツシ}此情^{モトオホカミ}は殊小深き。唯人のみ然りと云ふ。非^{モトモツシ}交生とし活る物に殊小其情を深り。と云ふ。実

のも草木の華実の節序あり。鳥獸各々孳尾する。時に定まり有る。自然の道なり。然るに草木を更なり。鳥獸は一産小多子を生む。人々大抵一産小一子を生む。常なるを鳥獸に如く構精の時を遠り。まじき道理なり。そを近く猫狗のどの交時を檢る。其物に如く。經水あり。春秋兩度の構精の時。人を月おとひ。經水あり。月おとひ。構精の時。有る。論を俟む。然れを經水。一二日の間。形を受胎養生の時の日。おとひ。經水。構精の良時と知るべし。此事の就るを。別々委しく考ふ。記せる物有る。今大意のみ云ふなり。

夫万物始出於東方。易氣始生。受形之道也。故東方為仁。南方為
 正於上。會正於下。尊卑之象。定禮之序也。故南方為禮。西方會用
 事。而万物得其宜。義之理也。故西方為義。北方會氣。形盛。易氣含
 閉智之類也。故北方為智。中央所以繩四方行也。信之決也。故中
 央為信也。

此條尤前章の接續せる文なるを。此所の無用は語を畧し
 訛文をも取直して載せるなり。委くは本書の就て見るに
 中央を智と為あるを云ふ。其訛なるを。此節尤上の謂
 乞下引く諸書此文のを知るべし。此節尤上の謂
 四の五常の起原。及む五方の配合せる所以を明せる古説
 形るが。其説の古書亦多く所見する中。其に人體の具は

依趣之詳小説得之。前漢書天文志。歲星東方春木於久。五常仁也。五事貌也。仁虧貌失。逆春令傷木氣。罰見歲星。晉灼云。太歲在中。仲則歲行三宿。太歲在四五。四季則歲行二宿。二八十六。三四十二。尚行二十八宿。十二歲而周天。惑南方夏火也。視也。禮虧視失。逆夏令傷火氣。罰見熒惑。晉灼云。常以十月入太微。受制而并。太白西方秋金義也。言也。義虧行列宿。司無道出入無常也。言失。逆秋令傷金氣。罰見太白。晉灼云。常以正月甲寅。至熒惑。四十日。又出西方。二百四十日而入。入三十辰星。北方冬水智也。聽也。智虧聽失。逆冬令傷水氣。罰見辰星。中央季夏土信也。思心也。仁義禮智以信為主。貌視言聽以心。晉灼云。常以二月夏至見東井。八月秋分見角亢。十一月冬至見牽牛。出以鎮星。辰戌入以丑未。二旬而入晨候之。東方冬候之。西方也。

為正。故四星皆失。鎮星為之。勤。晉灼云。常以甲辰。元始建。斗而周也。禮記。鄭玄註。木神則仁。金神則義。火神則禮。水神則智。土神則信。外也。有之。其大抵。知者為之。而周也。禮記。鄭玄註。木神則仁。金神則義。火神則禮。水神則智。土神則信。外也。有之。其大抵。知者為之。星之神。言也。金神也。太白金星之神。云云。火神也。熒惑星之神。云云。水神也。辰星之神。云云。土神也。鎮星之神。云云。言也。下引。家語。此文。云云。心得。舊。智。土。信。水。配。也。說。有。在。誤。也。五行。大義。信。水。如。白。虎。通。五。性。者。何。謂。仁。義。禮。智。信。也。仁。者。不。忍。也。施。生。愛。入。也。義。者。宜。也。斷。決。得。中。也。禮。者。履。也。履。道。成。文。也。智。者。知。也。獨。見。前。聞。不。惑。於。事。見。微。知。著。也。信。者。誠。也。專。一。不。移。也。故。人。生。而。應。八。卦。之。體。得。五。氣。以。為。五。常。仁。義。禮。智。信。是。也。と有る也。正。今。代。本。文。釋。其。故。と云。依。之。

以ても知るべし。所以扶成五性也。此人所稟六氣以生者也。五行大義の五行者為五性六氣者通六情也。五行在人為性。六律在人為情。五性處內御易。六情處外御會。故情勝性則亂。性勝情則治。性自內出情自外來。情性之交間不容髮。說文曰。情人之會氣有欲者也。性人之易氣善者也。言此說文此徐鍇の通論の性猶火也。情猶煙也。火盛則煙微。君子以性抑情。企及者以情扶性也。故于文心書為情也。と云ふなり。性云む心得なきなり。乃て世に有る人々誰も各々五常に性字賦し得孔中の一行を取て其本性の立る事あり。そは彼て木性なり。此て火性れと云ふ類あり。此事は興王に既にも云ふ如く。加に古昔に出る國を關を道を傳ふし。天皇氏太昊氏とも。此木徳の國なり。渡して。蠶化は民を會養ありし故。木徳風姓は王と稱せるより。濫觴なる事なり。不

太昊氏以前に出る彼國を關する諸氏より多くて。この皇國を渡する神眞ありし事の説に中し。此の尽きなき。非ざるを委く。太古傳に見る。然るに太昊氏は古と。孔子家語の昔丘也聞諸老聃曰。天有五行。木火土金水分時。化育以成萬物。王肅云。一歲三百六十日。五行各主七十二。其神謂之五帝。五帝五行之神佐天生物者。○今謂此五帝。と云ふ五神の各別。古之王者易代而改號。取法五行。更王終始相生。亦象其義。是以太皞配木。炎帝配火。黃帝配土。少皞配金。顓頊配水。太皞伏羲氏。炎帝神農氏。黃帝軒太皞氏。其始之木。五行用事。先起於木。木東方萬物之初。皆出焉。是故王者則之。而首以木徳。王天下。其次則以所生之行。轉相承也。

あて畧文あり。委く本書小就る見るべし。但し本書小死
して後小五行小配せり如く云るを誤り。生前元より其
性徳形りし故小没後小も然を稱せる物。王子年拾遺記
をや。其由を既小太古傳小委く説く。王子年拾遺記
小。太昊氏以木徳稱王。故曰春皇。位居東方。以合養蠢化。叶于
木徳。其音附角號曰木皇。と有るを知らし。四小帝王年代
王首帝王五運起自太昊也。太昊氏より後。所生此行を以
とも言り思合を爲し。心し事も拾遺記小。黄帝此事を以戊己之日生。故以土徳稱
王也。乾鑿度小。孔子曰易之帝乙。為湯書之帝乙。六世王同名
也。殷録實以生日為名。順天性也。同以乙日生。天之錫命也。凡
と有るを所知り。はた即か彼を金性。去きて水性。凡と
と。更小論む無。其生時に王氣を更なり。其年月に于も有る
事ありりし。

ま其を本性小立るを。生日に干を用ふる事也。日を人主
と曰。十日を一句とし。十干を其十日に名を設くる者なり
故小。そ字重く取る定免小や有らむ。然る字兼辨。孔子
得土曰宮。三言得火曰微。五言得水曰羽。七言得金曰商。九言
得木曰角。と云。依妄説より事起る。生年に納音小從りて。
姓字定あると云ふ説を作り出る。今しも本命的殺形と云
ふ事あり。最恐しき事小云む。喧くた。皆か欺天の妖説。凡
る。いと。已精しく辨り明せる物有る。所狭けき。凡て此
此小を記さ。不審しく思ふ。人問答ふべし。凡て此
本性に人の各こも甚く相違ある事。五行大義小。文子曰。
人者天地之心。五行之端。是以稟天地五行之氣而生。為萬物
之主。然受氣者各有多少。受木氣多者。其性勁直而懷仁。受火
氣多者。其性猛烈而尚禮。受土氣多者。其性寬和而有信。受金

○

氣多者其性剛斷而含義受水氣多者其性沈隱而多智五氣
湊合共成其身氣若清敏則其人精俊爽如也昏濁則其人愚
頑也。案於此の説文の性人之易氣性者生也とある通論の
人因五方之風山川之氣以生故曰性者生也と有り。実
おも五方之風山川の氣の因る世も産土の云と云
とく。国も處も因る其性質の異あり。其大已の如く人因記
ちふ物も本於る年久しく国く人散り交りて。驗み
る事ども字書初る物有る未の於記し果るくも所思
ざる。老子云會易精氣為人氣有厚薄得中和滋液則生賢智
人得錯亂濁辱則生貪性人九五氣有正邪清濁初未得正氣
在卑劣為善受卑氣居尊勝興惡氣之初也。齡齒脩長氣之末
也。命相短促也。貴賤富貧好醜善惡性情年命乃有萬途難以
具辨知久則哲。惟帝其難非明聖者孰能辨識此並論其生月

當五行氣盛衰時也と有依れどは然も有る説なり。古學者
いかに漢説を嫌ふとも。是はりて此事を心得る在る。今
此を今筆の因る如く世に古學者といふ徒にたふし故大
人たちれ声をはらむる漢説を嫌むむげの文盲なる事此
傍いしく思ひ出らるし任の云なり。信了今擧る大
義の説の如く人を知ると難なか中難事ある。同書
小文子の如く五の二五等の人品を擧る依る記せ
る説とも有る。全錢衛らる人をもし人此品とある善惡を
知むと思ふ。稚川翁の外篇の行品に善四十人惡四十
五人允るを八十五人あり其真偽をわらう於十條を熟読し
る於其以たる所と其依る所と其安むる所とを察せむ
る及た無く然して我は其善者小れらむ其惡者小似
らむ事を務むるべきなり。此を抑人此五氣を稟るる種く有
る事也。其五運小因る事なるをし。古書も多く所見するが。
其五運の事也五行大義小。春則木王火相水休金囚土死夏

則火王土相木休水囚金死。六月土王金相火休木囚水死。秋則金王水相土休火囚木死。冬則水王木相金休土囚火死。と有る是なり。あは淮南子地形訓了。木壯水老、火生金囚、土死。死、金壯、土老、水生、火囚、木死、水壯、金老、木生、土囚、火死、と同説あり。名目此替むる此みなり。あは五行を于支ル配せし事也。太昊氏始免之于支字作をる當昔より此定ぬる事を論ふも更ぬるか。其于支も五行の盛衰小從に也。與尔盛衰あり事也。同書小。春則甲乙寅卯王。丙丁己午相。壬癸亥子休。庚辛申酉囚。戊己辰戌丑未死。夏則丙丁己午王。戊己辰戌丑未相。甲乙寅卯休。壬癸亥子囚。庚辛申酉死。六月

亥子死。上のも此の六月と云へる也。即六月は土旺を云ふが故の六月と秋則庚辛申酉王。壬癸亥子相。戊己辰戌丑未休。丙丁己午囚。甲乙寅卯死。冬則壬癸亥子王。甲乙寅卯相。庚辛申酉休。戊己辰戌丑未囚。丙丁己午死と有るを以て心得也。今右に説等小據て也。其圖式を作を斯の如し。此五行行于支は五運也。歳節日時悉く係る故也。分道は時小。皆え此時運を某の分得たるを以て。其厚薄盛衰は差別有りとふ古説なり。あは同書也。此を區別せる五行十二運の説あり。其を次條の附録をるを見え知る也。

夫乾坤者万物之祖宗也。会易者血氣之男女也。左右者会易之道路也。水火者会易之徵兆也。龍德仲冬子在坎卦。左行。虎刑仲夏午在离卦。右行。是故男一歲從坎起。左行則二巽三乾四兌五。离六震七坤八見九即坎。十即巽也。女一歲從离起。右行則二兌三乾四巽五坎六見七坤八震九即离。十即兌也。各以次而數。故至十數皆在四維。此之謂年命也。

此章初免多。会易之徵兆也。と云まむ。素問の会易應象大論小採五。龍徳と云まむ。在离卦右行と云まむ。京氏易傳下卷小取り。其已下。五行大義第二十三條小採五。○好尚云ふ。六條始免小。夫乾坤者会易之根本。坎离者会易之

五行干支五運圖

	冬	秋	夏	春	
土旺	土旺	土旺	土旺	土旺	土旺
囚	囚	囚	囚	囚	木 寅卯
休	休	休	休	休	火 巳午
王	王	王	王	王	土 辰戌 丑未
相	相	相	相	相	金 庚辛 申酉
死	死	死	死	死	水 壬癸 亥子

性命也。龍德、仲冬、子在坎卦、左行。虎刑、仲夏、午在離卦、右行。會
從、午、易、從、子、子、午、分、行、子、左、行、午、右、行、左、右、吉、凶、之、道、也。凡、遊
年者、從、八、卦、而、數、男、一、歲、從、坎、起、左、行、八、卦、則、二、巽、三、乾、四、兌、
五、離、六、震、七、坤、八、艮、九、即、坎、十、即、巽、也。女、一、歲、從、離、起、右、行、八
卦、則、二、艮、三、坤、四、震、五、離、六、兌、七、乾、八、巽、九、即、坎、十、即、艮、也。各
以、次、而、數、故、至、十、數、則、皆、在、四、維、所、謂、遊、年、是、也。と、作、ら、る、也。
注、釈、も、委、く、為、ら、る、也。其、後、所、以、有、之、也、今、出、せ、る、本
文、小、直、さ、ま、ら、る、也。然、る、と、注、を、就、ら、る、に、先、ら、る、也。旧
注、に、終、小、記、せ、り。見、む、人、語、る、事、勿、り、也。○此、條、初、を、吉、凶、
之、道、也、と、云、す、也。京、房、が、易、傳、に、孔、子、云、と、有、詠、語、中、の、分

裂、錯、乱、し、て、出、る、文、字、據、を、聚、免、て、著、せ、る、也。此、易、傳、予
た、漢、魏、叢、書、中、に、本、る、が、誤、字、錯、乱、行、文、多、く、中、に、絶、る
讀、く、所、も、有、る、也。此、傳、の、拳、の、文、ど、も、た、王、應、麟、が、困
学、紀、聞、孫、星、衍、が、孔、子、集、語、形、ど、小、引、ある、を、按、し、て、載、
せ、り。叢、書、に、本、の、異、る、文、も、有、る、を、怪、む、と、勿、也。抑、
此、句、に、た、會、易、に、旋、里、の、刑、德、ある、義、を、述、ぶ、其、會、易、の、人、に
男、女、を、更、り、り、万、物、に、牝、牡、雌、雄、を、兼、説、を、る、人、に、年、命、に、定
悔、る、推、法、を、示、せ、る、古、説、也。阿、波、社、に、推、法、を、然、る、錯、乱
む、古、今、の、学、者、の、一、人、も、此、旨、を、見、得、る、者、あ、く、う、故、世、の
易、家、儒、家、に、と、其、見、の、過、多、く、は、此、等、に、書、を、然、し、も、心、を、深
め、て、解、し、得、む、と、し、も、思、え、不、其、見、の、疑、が、る、を、困、り、取、
見、る、事、も、無、き、ば、今、を、り、後、世、と、云、す、も、頼、み、難、く、所、思、
依、り、篤、胤、深、く、太、昊、伏、羲、氏、の、誓、ひ、請、せ、る、旨、あ、り、也。世、に、有
る、欺、天、の、妖、説、を、推、は、む、と、寢、食、安、く、思、ひ、す、焦、し
る、考、を、明、せ、る、事、の、し、有、き、と、衆、人、に、醉、を、誰、の、を、傾、
説、を、信、り、と、云、む、或、は、殊、に、異、端、と、証、を、讓、さ、る、事、も、有、
○三十一

かむ。然もど此年命の事ゆしも。小縁此事。非ら。卦卷も
畏支御迎。此御體固め。係る由縁も有れ。耳。小悪言
の。入るを怒る。黙止し在。登さ。小非。故。かく考。予。誓。し。て。
人。た。し。然。も。有。ら。た。有。色。易。曆。の。祖。神。小。繁。し。白。さ。む。と。れ。
り。其。た。次。條。に。未。あ。る。と。ま。く。九。遊。年。者。と。云。り。己。下。た。上。件
の。論。ふ。ま。視。る。知。る。し。ま。く。九。遊。年。者。と。云。り。己。下。た。上。件
此。古。説。を。稽。牙。五。行。大。義。か。九。遊。年。者。從。八。卦。而。數。男。一。歲。數
從。離。起。九。行。八。卦。則。二。坤。三。兌。四。乾。五。坎。六。艮。七。震。八。則。在。巽。
巽。不。受。八。進。而。就。離。々。則。是。八。坤。即。九。兌。十。以。次。而。數。一。若。至
坤。々。不。受。一。還。退。就。離。女。年。一。從。坎。右。行。亦。如。離。法。見。不。受。八。
乾。不。受。一。皆。歸。於。坎。故。至。十。數。皆。在。正。方。也。と。有。る。也。折。衷。訂
正。して。出。せ。り。其。た。此。八。卦。方。位。の。皆。例。の。擬。方。位。ゆ。る。と。更
數。ふ。る。と。云。ち。と。都。て。前。件。小。説。に。男。故。女。離。の。古。義。小。合。は
之。大。義。の。撰。者。ち。ま。ら。此。古。矣。ま。知。さ。る。人。か。非。お。れ。た。此。て

決。め。て。後。人。の。写。し。誤。ま。る。ゆ。り。ま。く。乾。坤。一。を。受。れ。交。與
見。た。八。を。受。次。と。云。ち。と。本。書。小。其。説。あ。る。と。古。義。か。る。と。か
於。て。無。さ。事。れ。ま。た。此。た。し。撰。者。此。説。も。有。り。取。る。ふ。足
さ。る。証。言。ゆ。り。按。ふ。は。此。説。を。十。數。ま。の。四。正。小。歸。せ。む。事
を。思。ふ。る。淺。人。の。杜。撰。ゆ。り。し。を。蕭。吉。せ。ゆ。り。是。れ。取。む。載
せ。る。ふ。を。有。べ。き。板。海。俗。有。ゆ。り。易。書。類。の。借。途。法。也
云。ふ。卦。法。あり。そ。た。大。義。の。擬。法。か。似。る。と。有。る。と。異。法。か
か。其。大。畧。を。一。甲。子。六。十。年。於。て。一。元。と。志。る。上。中。下。此。三
元。と。稱。し。十。干。此。易。干。會。于。別。ち。且。加。以。擬。方。位。か。就。五。上
元。生。此。男。元。離。卦。也。中。元。生。此。男。元。巽。卦。也。下。元。生。の。男
元。兌。卦。也。り。數。予。始。免。之。工。順。ト。逆。と。易。干。の。元。元。り
右。元。會。于。於。る。と。右。り。左。元。生。の。元。元。震。卦。の。元。元。か。卦。り
中。元。生。の。元。元。乾。卦。の。元。元。下。元。生。の。元。元。震。卦。の。元。元。か。卦。り
ト。順。工。逆。と。易。干。の。元。元。右。元。生。の。元。元。巽。卦。の。元。元。か。卦。り
右。元。生。の。元。元。是。れ。越。躍。と。り。八。を。受。り。一。を。受。交。と。い。ふ
法。ゆ。り。皇。國。の。故。き。人。の。杜。撰。ゆ。り。ち。も。知。ら。文。拾。芥。抄。中
抄。ゆ。り。皇。國。の。故。き。人。の。杜。撰。ゆ。り。ち。も。知。ら。文。拾。芥。抄。中
見。ゆ。り。乾。坤。者。會。易。之。根。本。と。云。會。易。か。て。天。地。万。物。の

男女を總オホナする大名形ナるか故也。天地の会易を男女とも稱イむ。人物は男女の会易とも稱イふ也。前卷に既ツクる委曲クは説く如し。張介賓の会易體象論に、凡ニ万物、化生總ニ由ル二氣ニ。得レ乾道者、於レ人爲レ男、於レ物爲レ牡、得レ坤道者、於レ人爲レ女、於レ物爲レ牝。○坎、離、者、會易之性命也。坎、北方子也。位して、中男易に始り。離、南方午也。位して、中女會に始り。斯る此句に謂ゆる會易也。是れ二卦に會易を云ふ是固トる也。人ハ男女の會易と云ふ也。然るに此也。坎、離、二卦也。男女の性命なりと云ふ意なり。此、會易もし天地の會易を云ふは、むくも、坎、離、をそれ性と云ふも、命と云ふも、云、極ニじきニ謂ルあると深く思ふべし。是れ生也。生、出、人ハ盡ス。それ分道の時、主卦、及ビ生

年、此主卦に應ずる事、異カり無レれど。男、自然ナる北、坎、易氣の剛動進ある性命を受け。女、自然ナる南、離、會氣の柔靜退ある性命を受け。形貌も、自然ナる異カる也。正、坎、離に感應、資スるか故也。右、此如く傳スりし形也。然ラるに其、坎、男女と異ルる本、此由リ縁ニて如何トと云ふ也。○龍德、仲冬、子在坎、其次の二句、小、説、著、る見るべし。○龍德、仲冬、子在坎、卦、左行。虎刑、仲夏、午、在、離、卦、右行也。淮南子に天文訓に、北斗之神有リ雌雄。仲冬、始、建、於、子、節、徙リ一辰。雄、左行。雌、右行。仲夏、合ニ于ニ謀ニ刑。仲冬、合ニ于ニ謀ニ德。北斗之神と云。北斗星を司る神と云。是、也。此、會易に行はる。本、小、日、冬至、則チ斗、北、中、繩。會氣極也。坎、水、离、火、此、用スる。小、始、也。日、夏至、則チ斗、南、中、繩。會氣極也。易氣萌。故、曰、冬至、爲レ德。高誘云、德、始、生也。日、夏至、則チ斗、南、中、繩。會氣極

刑會氣の午より起る義字述也。男女此年命を定むる法を
 示せる語ゆる事也。上文此坎離也。會易の性命と云ふ語は
 相照して辨るる。然れど此會易也。人此男女云ふ事也。
 男子此年命也。坎子より左行の數を旋り。女子此年命也。離
 午より右行の數を旋る由を以て。子午分行する事。子を左
 行。午を右行と云ふ事なり。但し龍徳虎刑の運也と云ふ也。即ち
 北斗の易神會神の旋り小因りる
 事此を也。男女此年命は運也。やがて其會神易
 神の旋り小做ふ道理ゆる事也。款なくも更なり。○左右、吉
 凶之道と也。素問に會易應象大論の。天地者萬物之上下也。
 會易者血氣之男女也。左右者會易之道路也。水火者會易之
 徵兆也と有る如く。易氣を天道に旋り小從む。左行して万

物を生長する事。北斗は雄神之司也。會氣を地道に從む
 右行して。万物を收藏する事。北斗は雌神是之司也。其順
 逆ふ故也。生長と收藏とふ就也。姑く順を吉と稱し。姑く逆
 を凶とは稱せり。然れども一會一易は運行、やがて易ゆる道
 道の別る、所ある故也。此は實の吉凶非交、會易男女は
 べし。其た如く天文訓に。北斗、所擊不可與敵。天地以設分而
 為會易。易生於會。會生於易。會易相錯。四維乃通。或死抑男子
 或生。万物乃成と有るを思ひ合せても知る處し。抑男子
 は左尊位小居る左行し。女子を右尊位小居る右行する道
 理に本也。我が神世に初發小。皇祖二柱神。まて小天皇祖神
 の詔命を承賜は也。まは彼、天柱を建て地軸を定免。国土人
 種を産生せむが為也。二神あむ誘む。始めて横精有る時

しも彼天柱を旋流す。男神を右行し。女神を左行し給ひし
る也。宜らぬ子好らぬ嶋に生出ある事。天皇祖神の由
を白し給ふ也。太北を占む也。天柱を旋る左右字過る流祥
ある也。改免旋きと教ふ給ふる小從也。男神は左行小女
神を右行小改免旋也。構精有る事。好子善嶋所居
生出る事。男を左位小居る左行し。女を右位小居る右行
する事道とし。此道小年小時也。凶ある事此始ありける。事
あか精しく知ぬをし。思ふ人。予か古史傳小就見
るべし。借天皇祖神の太北を占む給ふ事と有る也。彼中央
の天柱謂ゆる易威の旋る小易氣を左旋し。余氣を右旋し
る也。此形を為す御覽して占む給ふ事。此事也。既
る第一卷小説より。此奇なり。妙ある事。和漢此古説
の互小精鹿あるが中小斯しも符合する事。豈これ必也。

然る處を由緒なく。然る也。右年命也。男を右行女を左行此推法也。
くても然らぬやも。此古傳を起る事。疑む無し。然る也。太古傳小云
亦如く。皇祖大神。此赤縣州も天降り給ふる事。彼国小
は天皇氏と申し傳ふ。易威を興し。天柱地維を建る神功畢
る也。此紫微宮小昇る。上皇太一及び元始天尊小代り也。諸
神を主宰し給ふと云ふ。此古傳も存也。天皇太帝とも。皇天
上帝とも。天帝とも。唯此帝とも白せり。上皇太一也。天
を白し。元始天尊と天皇産靈神を白也。其れし太古傳小委
く考ふ。此予か始免を言ひ出さる。説形也。人
の異する事。思ふ也。往く小かく。此を第 條小引ある天
云ふを見む人。事勿り也。文訓小。紫宮者太一之居也。紫宮。執斗而左旋。且行一度。以周

於天云々。又同篇小。帝張四維運之以斗月徙一辰復反其
所。と有依古説了相発し考ふ。北斗は旋建ある。元太
也上皇太一也。神威小資は事なり。小論を無きと。天皇太帝
を此主宰と坐す。之を運らし給ふと有也。其雌雄神の
左右小分行せる事も。天帝は神慮小出ず。其は天皇祖
神の。か此太北の御占小頼給する神態ある。古也疑を無し。
抑諸政此本を齊ふる。北斗は旋運をなす道なき。然し
も定免給する上。余の星宿は旋ても何も。此天神の神量
小定め給む。けむ事云。海くも更なり。是を以て彼国は古傳
る。天皇氏以木徳王。于是是。元陳樞以立易威とを傳りあり
る。はる其を遥後れ。かう大國主神。即謂ゆる太皞伏羲氏
の渡り行して。天地の易道小頼る。彼蠢民ら城教予給ふ

と。右は神理の古傳小本秘き。此年命は式も定免給けむ
を。其説をやく著筮の易法了於し消れて。周世以來。普然
く聞え。交成爲きと。謂ゆる天ある未也。此文字喪は交。適尔
京房が易傳ある。孔子は遺語小分錯し。然も存する。此
と。此古説の賜物なり。尚も此推法を下小委曲小書
著はるを見依る。然る有也。斯はり。其の大義を發せる
ふ徒。は。其見いと。書た。古今は有也。無く。世の学者と稱
を知ら交。古学者と聞ゆる。天の御中主神。皇産靈神。伊邪
那岐神。ちの。開闢し給する。深理を發り。漢学者流。上皇
此神。ちの。開闢し給する。深理を發り。漢学者流。上皇
太一。元始天尊。皇天上帝。形と申をも。唯る空理。此寓名の
如く心得る。其本縁を探訪む。此と云ふ事。疑はる。其
やかる。我が神典ある。其く此神と云ふ事。疑はる。其
知ら交。適尔も今の如き大論を聞ると。甚く驚き。此は言

加於笑む。様々い思評して。一世に限らず。然る拙学。尔老果の
 不覺。哀き。悲しくも有き。と於此。誠や伊勢。貞夫。乃
 是。是。字。も。て。盲。く。千。人。の。乃。り。と。云。れ。り。然。れ。ど。亦。乃
 し。も。思。ひ。捨。へ。き。事。ふ。と。非。法。を。報。む。わ。か。教。育。は。從。ふ。徒。乃
 る。盲。学。に。徒。を。も。次。は。誨。して。進。む。大。相。半
 半。の。も。及。ぶ。處。く。此。後。を。し。努。む。處。き。形。り。



○此は遊年也。即年命此事也。亦大義小。遊年之名。以
 運動不住為義。以其隨歲行遊不定一所也。と有る名。其後
 尔用ひしなり。其大皇国小も旧くかく稱を來き。抑人ノ生
 年。定はる本命に卦也。生涯より身を離き。更屬從ふ。是
 年命卦也。毎年は徒に替は故に遊年と云む。年命と大稱ふ
 なり。然る小大義小。別小年立とも行年とも言ふる推
 法ある也。決免て此遊年推法の異説有るを謬とす。別事
 とある載せる物なり。用ふる事れり。其推法は。大畧に。拾
 二。男。自。丙。寅。順。計。之。女。自。壬。申。逆。計。之。假。令。有。五。歲。男。自。丙。寅
 順。計。當。年。庚。午。為。行。年。有。七。歲。女。自。壬。申。逆。計。丙。寅。為。行。年。他
 効。之。と。有。る。が。如。し。此。の。実。理。小。叶。た。ざ。る。推。法。有。る。也。古
 説。字。知。り。後。人。の。妄。作。有。る。也。疑。む。所。し。大。義。小。就。て。委

理を以て。此方よりある。然て言ふ。其左右は年カ共の。其性
此自然ある也。互ふを此順逆を論ぜむ。云々。右行も易
なり。云々。是逆なり。自性を取ては。其右行や。此順
あり。易は左行も自性を取ては。其右行や。此順
逆とも云ふ。然るを彼、天地定位の章なり。數往者順と
也。男を左行は順。女を右行は順。數往者。往未エラヌエの事。知
る。云々。知來者。逆と也。今悔を過來スの事。とも云ふ。知來者。
男を右行の逆。女を左行の逆。數ふる。云々。是故。彌明イミ、フキ
けし。儲者。往來相迎なり。逆。免事。知辨ふる。法ある故。是
故。易者。逆數也。と云ふ。是と。既。上。も云ふ。か
如。○好尚云ふ。此處。追。記せる。章也。遊年の主卦方

位。據。互。吉。凶。有。事。備。解。れ。れ。類。觸
を。載。せ。る。なり。然。も。今。本。文。も。見。え。ぎ。む。如。何。あ
ら。む。あ。別。小。書。し。措。り。む。遊。年。四。説。と。云。ふ。物。也。此
禍。害。絶。命。あ。ど。此。名。稱。を。挙。げ。ら。む。其。信。用。を。給。ふ
事。云。ふ。も。更。なり。此。書。を。讀。む。人。能。見。て。能。撰。む。採。る。べき。事
也。云々。

遊年所至之卦自有八索焉。上變為生氣。中變為絶命。下變為
禍害。上中變為天。中下變為福德。上下變為鬼。三爻皆變
為養者。三爻不變者。遊年也。

此條也。前條小引ありし五行大義の。遊年者。從八卦而數。

其た如死八宅明鏡と云ふ物。お此八卦の变法字以て立
る法ありて八名あり。推法も詳る記せむと其推法及び
名ども皇國の傳を述べる也。異形も多かるま以て
知る也。其た五行大義聖濟總録を此を詳説
ぬるも其は略説中此詳説あり元より全説れり。各
も教漏りしは後人の杜撰の作也。調りるが故なり。其
た下此小註る次論。○此遊年所至之卦自有八索場
ふま見ると知るべし。とて。前條小説と依遊年此卦この年此行遊する小節
これ主卦小至と云。自起りらる其卦この合一變化する
由なり。其變化する趣也。下小次と説著は凡そ如し。但し
此節これ主卦の方位此正説也。上小次と説明せれ。今
更云云也。五行大義八宅明鏡の作者ら大更形り。周世
以來一人も太昊氏の定めし八卦の真方位を知れる
は無れ也。此遊年節卦此自起りらる八索ある真説は
この小解き著せる書有と無く。其間小後人の妄誕
も多く交りて人々此是非を辨るが雷同じる畏るまじし

此方位及び時節を恐む。思ふに時節及び方位を避が
る人の多かる。或見るを得堪交也。今かく考ふ著はも
形も。○此遊年上變爲生氣と云。何れ卦尔よき。其遊年小得
る卦也。其一年此年命なり也。身小履もちて節を行遊
る也。巽也。冬至坎王の節小至り。乾也。立夏兌王の節小
至り。兌也。春分乾王の節小至り。離也。立秋震王の節小至
り。震也。夏至離王の節小至り。坤也。立冬艮王の節小至り。
艮也。秋分坤王の節小至り。坎也。立春巽王の節小至り。
各これ上文字變じて。其節此王卦小合同する也。生氣
と爲る義也。是一變なり。是は巽三の上爻變じて坎三
三と成るな云ふ。餘は六卦も之小協する知る也。生氣
禍害ありと云ふ八名也。もと卦名れら交り何れの卦小あり

節ノ小至リ。上爻の變じあるヲ稱ス。○中變ヲ為シ絶命トと
 辭ハ設けしト是ヲ以テ知ルべし。○中變ヲ為シ絶命トと
 九。巽ニ艮ニ王ニ節ハ小至リ。乾ニ離ニ王ニ節ハ小至リ。兌ニ震ニ王
 節ハ小至リ。離ニ乾ニ王ニ節ハ小至リ。震ニ兌ニ王ニ節ハ小至リ
 王ニ坤ニ坎ニ王ニ節ハ小至リ。艮ニ巽ニ王ニ節ハ小至リ。坎ニ坤
 王ニ節ハ小至リ。各ノ中爻ヲ變じて。其ノ王卦ハ
 合同ニ依リ絶命ト為シ義ハ小ニ。是ニ二變ハなり。○下變ヲ為シ福
 艮ニ三ニ成リ。乾ニ三ニ中ニ爻ヲ變じて。離ニ三ニと成ル
 を云ふ。餘ノ六卦モ之ノ小ニ働ミて知ルべし。○下變ヲ為シ福
 害ト九。巽ニ乾ニ王ニ節ハ小至リ。乾ニ巽ニ王ニ節ハ小至リ。兌ニ
 坎ニ王ニ節ハ小至リ。離ニ艮ニ王ニ節ハ小至リ。震ニ坤ニ王ニ節ハ小
 至リ。坤ニ震ニ王ニ節ハ小至リ。艮ニ離ニ王ニ節ハ小至リ。坎ニ兌

王ニ節ハ小至リ。各ノ下爻ヲ變じて。其ノ王卦ハ
 合同ニ依リ絶命ト為シ義ハ小ニ。是ニ三變ハなり。○上中變ヲ為シ
 乾ニ三ニと成リ。乾ニ三ニ下ニ爻ヲ變じて。巽ニ三ニと成ル
 云ふ。餘ノ六卦モ之ノ小ニ働ミて知ルべし。○上中變ヲ為シ
 天鑿ト九。巽ニ坤ニ王ニ節ハ小至リ。乾ニ震ニ王ニ節ハ小至リ。兌
 離ニ王ニ節ハ小至リ。離ニ兌ニ王ニ節ハ小至リ。震ニ乾ニ王ニ節ハ小
 至リ。坤ニ巽ニ王ニ節ハ小至リ。艮ニ坎ニ王ニ節ハ小至リ。坎ニ
 艮ニ王ニ節ハ小至リ。各ノ上中二爻ヲ變じて。其ノ王卦ハ
 王卦ト合同ニ依リ絶命ト為シ義ハ小ニ。是ニ四變ハなり。○
 此上中爻ヲ變じて。坤ニ三ニと成リ。乾ニ三ニの上中爻ヲ變じて。震
 三ニと成ル云ふ。餘ノ六卦モ之ノ小ニ働ミて知ルべし。○
 中下變ヲ為シ福德ト九。巽ニ離ニ王ニ節ハ小至リ。乾ニ艮ニ王ニ節ハ小

り。坎の坎ふ。至る節を。その遊年卦に隨ひて変せば依
 故の。西土の書とも伏位と稱し。皇國の傳ふて遊年
 と稱し來せり。然れど直の乾と重乾と其如し。輕
 此八字の各義を考ふ依ふ。遊年は善くも悪くも本は依
 して變化せざれを説も無きを。餘は七変を。海は八卦の
 上中下三爻を。天地人の三才の象として立つる物なるの
 故の。上爻の變をもて天を占む。下爻の變を以て地を占
 む。中爻の變をもて我を占ふ法を示して。右の字とて
 設ふてり。然らば元を各々卦名に有流の上の。此
 の泰といふ否と云む。觀といふ升と云ふ名を設ふる
 意はへ無なる非細と。彼を卦のなりて稱し。此を同卦も

節の依る各々替ふる。然れど上變字生氣と云ふ。上
 言ふ如く。天を易のして進むを以て徳と爲し。太一及び
 斗星の旋動を頼る。易を成し歳を成は故の。生を謂
 之。易の義を以て字せざる。五行大義の生氣者以其相
 金也。震變成離。木生火也。と云ふ。彼擬方位を轉化せり
 此の説は取るに足らぬ。乾兌の金は。震の八
 木は。予が改めたる古法位を見れば。知る。海は。八
 宅明鏡の引ある。王肯堂筆塵の説の。易中有會。有易。所謂
 太易少會也。會中有易。有會。所謂太會少易也。太易之中。易
 乾會兌。少會之中。易震會離。少易之中。易坎會巽。太會之中。
 易艮會坤。所謂先天之合。為生氣焉。と云ふ。此を理有。此
 言聞ゆ。下の字は。多く然る道理の叶はざる。此
 説も。取用するに足らぬ。儲世ある八卦書類の。此
 を生家とてみ出す。は。生氣を吳音のレヤウケと唱ふ
 し。聞訛を非。○下變字禍害と云ふ。地を會ふし
 わざと見え。

る退くを以て徳と爲し。天尔從ひて万物を生育吐出
るを。順柔之道と爲。然尔獨進みて变化するを。其順道
小違へる義を以て。禍害と字せらる。彼筆塵小。乾與巽
與震。金木土相尅。而子酉午相破。故爲禍害也。と云。五
行大義も同じ類の相尅説あり。此を乾金と巽木と相尅
し。坤土と震木と相尅する。と云ふ義を以て云。尔説尔を
ど。実尔乾も木も尅む。相尅る。此徒れ用ふる
配當小從。ありむも。坎與兌。金生水。艮與巽。火生土。此
相生。形る物もや。諸書此五行八卦説の妄尔る。大抵
斯の如し。借ある字を。クワカイト。○中変字絶命と云ふ
か。清音小唱ふる故。実形り。と云。○中変字絶命と云ふ
を。中て我あり。天地小事無し。我小事あり。其年命小
關。かる重を慎み。節と志。絶命と字せる。尔。五行大
命者。以其卦卦被剋制也。如震變爲兌。金尅木也。艮變爲巽。
木尅土也。又筆塵小。乾巽。艮與兌。震坎。坤皆以金而尅。易

凶莫甚矣。故爲絶命也。とあり。大義。元例の震木兌金。此説
形り。筆塵。此説。かく言。元理あり。如。尔。是。易。乾
與艮。震兌。坤坎。と成。ゆる。も。絶命と云ふ。を。省。み。ざる。説
形る。何ぞや。借ある字を。せ。千。ミ。ヤウ。と。世。を。濟。る。唱。ふ
形り。故。実。○上中変字天鑿と云ふ。我小年命尔。如。尔。依。変
あり。然。也。とも天進動。此徳を以て。我小應。ざる。道理あり
也。其幸靈。降して。我。を。鑿。療。治。る。義。小。叶。ふ。義。を。以て。天
医と字せらる。尔。筆塵。尔。五。鬼。と。號。ける。乾。與。震。巽。與
次。絶命。故。爲。五。鬼。也。と云。尔。上。と。同。じ。趣。の。非。説。尔。然
れ。此。は。五。鬼。と。号。ける。絶命。小。次。ぐ。凶。と。爲。る。も。然。る
非。説。り。且。古。説。形る。と。是。字。以て。知。る。際。し。○中下変字
福徳と云ふ。我小年命小動轉。此変あり。然尔小地。を。以
順徳を以て。之。小。應。ざる。象あり。地。の。富。厚。を。寄。して。我

を富饒なりとある義小叶ふが故小。福德と字せざるなり。
筆塵小。此字天医と号ける。易道主變其數以進為極故乾
父得九震長男得八坎中男得七艮少男得六合道主化其
數以退為極故坤母得一巽長女得二離中女得三兌少女
得四四數之合為天医焉。乾九合艮六坎七合震八坤一合
兌四巽二合離三易得十五而合得五故曰五數之合也。其
不合者皆凶矣と云ふ也。強説形り然る是八卦各々河圖
數ふより生る生成老幼三數ある事古くも聞えお其
方位のちりて乾一兌二離三震四巽五坎六艮七坤八の數
あり太昊氏十言の教の次第小依る也。乾一坤二震三
巽四坎五離六艮七兌八の數當る事も有と。河洛の
數を本據るなり其本數非也況筆塵小謂ゆる數を古
假令此數小叶るなりとも取る小足ざる強言形りし。
上下變る鬼吏と云ふ也。上小天の變あり下小地の變あ
る時也。遊魂鬼物を此中小在るを横行し我小災變字ふ

以義あるが故小。鬼吏と字せるなり。筆塵小を六然と
震巽與兌坤與離皆大親相刑故為六氣也と云ふ也。八
卦の中一卦も親く眷族形も無也。餘の字も然も
六然四然とも云はば云ふ也。然る此一字のみ豈さ
る道理の有あむや強説形る也。論を俟つ備世の八
卦書類よを遊魂と云ふ也。書する也。如繫辭小遊魂為
變と有るを思むる後人の故意は改め替ある名あるへ
し。○三爻皆變を養者と云ふ也。天地の變あり我ら中
小孕はるまむ。隨ひて變はる事。これ自然の道なり。天地
と共に變改ある能く天地の養を受る者と云ふ也。
故小養者と字せざるなり。筆塵小を延年と號ける。乾父
女艮少男兌少女所謂後天八卦也。後天之合為延年焉。乾
云子也。三爻皆變は此也。強は八卦何也。其對卦と成也。
自然の定也。此也。強は先天之合と云ふ也。後天之合
謂ゆる後天八卦の對衛して天。離坎なり外。後天之合

と云々きて有こと無く。其謂ゆる先天後天の説也。
 郡雍朱熹らか詛妄の説に元より取るふ足ざる事と。
 既論する如く形子の況る前後の字説小打合ざれど。
 此説も取る小足らぬ。世の有るは八卦書類に此字
 絶躰と考ける。大山と為る。何れに詠に形らむ。甚く
 心得がし。斯る此名字をヤウガと唱ふる。故実形也。
 抑おの八卦の八字也。下論ふ如く。皇朝了古く用む給
 る也。實のも小縁の事小非也。人小年と節くは慎之字
 誨示せる。古真聖の遺法と所思也。依の姫昌の例に擬
 方位ありし以來。その方位の轉化せらるる。倭漢の一人
 も。其欺妄を受ざる者有る也。無く。見ふ小得堪ふ非
 定のゆゑに為めれ。今新のその図式を作す。真の方位
 時節を知らしむ。見む人熟く認め。尔來を誤はら事勿也。

○年卦八索定位圖式

坎 子北 冬至	艮 戌 十月節 立冬	坤 酉西 八月中 秋分	震 未申 七月節 立秋	巽 午南 五月中 夏至	兌 辰巳 四月節 立夏	乾 卯東 二月中 春分	巽 丑寅 正月節 立春
小寒 大寒	大雪 小雪	霜降 寒露	白露 處暑	大暑 小暑	芒種 小滿	穀雨 清明	啓蟄 雨水
生氣 井	絶命 盛	天鑿 升	養者 恒	福德 鼎	鬼吏 大過	福害 姤	遊年 巽
鬼吏 需	福德 大畜	養者 泰	天鑿 大壯	絶命 大有	遊年 天	生氣 乾	福害 小畜
禍害 需	養者 損	福德 臨	絶命 歸妹	天鑿 睽	遊年 復	絶命 同人	鬼吏 中孚
養者 既濟	禍害 賁	鬼吏 明夷	生氣 屯	遊年 蒙	天鑿 革	福害 家人	福德 家人
福德 七	鬼吏 頤	復 明夷	遊年 賁	生氣 噬嗑	絶命 隨	天鑿 否	養者 益
絶命 比	生氣 剝	遊年 坤	禍害 蒙	鬼吏 晉	福德 萃	養者 否	天鑿 觀
天鑿 比	遊年 剝	生氣 謙	鬼吏 小過	禍害 旅	養者 咸	福害 否	絶命 漸
遊年 坎	天鑿 比	絶命 謙	福德 解	養者 未濟	禍害 困	鬼吏 言	生氣 渙

此圖式を取て。八字此方位及び其時節を知依法也。後
 松前條此法尔從りて。年命此卦を得て。譬へて兌の年命
 なる也。右方尔縦小記せる。八卦の兌を見る。横小其條理
 之推し察れ也。立春雨水啓蟄三節此間也。鬼吏巽方尔在
 也。春分より三節此間也。生氣卯方尔あり。立夏より三節
 の間也。遊年兌方尔在也。夏至より三節の間也。天医午方
 尔あり。立秋より三節此間也。絶命震方尔在也。秋分より
 三節此間也。福德酉方尔あり。立冬より三節の間也。養者
 艮方尔在也。冬至より三節の間也。禍害子方尔ありと知
 依る如し。餘此七卦も。是小仰むる知定むる也。但し言ハ
言ハ

字唯方位此事小用ふる事如く聞ゆ免と然
 尔大非矣其時節四十五日が間也。事と其氣の行を
 時もて方位の忌て其一歳を持た事なり其大古は此
 書ども又慥ある例あり。下小引出る書等の如し。此
 八索を皇朝小用む給へ依る事也。何れ此御時よりと云ふ
此詳らゆと。毎年此十二月十日小。会易察より連署し
 也。來年此御忌此勘文を奏進を依る事小也。其案文を朝野
 群載を見え。亦其餘此諸書のも。種々見及ぶる事ども
 有まと。此を思ふ旨有まと別小記をむと也。○好尚云ふ。
 亦此年命此事を師翁此致す措かきある物有也。今因て
 小記して示す事此如し。
 年卦者從本卦而數。並至其年數而止。謂之年命也。此天

地定位章。知來者逆。是故易逆數也。と有依也。彼處カレコ註
せる如く。後來此事とも知依カレコ。其本卦を左行の數
ふる義ヨシなる也。上文の謂ゆる本命卦ホノミ己ミ小定海コト後ノチ。
其本卦を數する。次々ツギツギの八卦の行遊する也。年卦とを
定むる事あり。其を譬する乾命カネノミれ也。乾一兌二。離三震
四。坤五艮六。坎七巽八。乾九と様サマの本卦を復タガヒす也。其齡
の數を。謂ゆる左行の逆の數する。其至ト止トある卦。
やがて其歳の年命トシノミなるが故也。至ト其年數而止トと記せ
る。是れ就て密ヒソカふ。五行大義の遊年と云。年命の卦を定
むる法あり。其說の遊年者男一歳數從タラシ起ハジ左行の卦
則スレバ坤三兌四乾五坎六艮七震八則スレバ在ア巽九不受ウケ八進マ而
就ツキ巽九兌十以テ坎而數一若シ至ル坤ノ不受ウケ一退ヒ而就ツキ巽故

至ル十數皆在リ。正カ方也。女一歳從テ坎右行。艮不受ウケ八。乾不受ウケ一。
皆歸ル於テ坎云と有リ。俗ノの八卦書類ノ借途法と云。
上中下元を立テ。工順ト逆ト順ト逆ト稱ス。男ノ女ノの法
ゆゑ。越ス不レ躍ス不レ替スある。推法の本と聞ク。其ノ古ノ法
の合ハざる。說ハゆる。疑ハゆる。後世ノ杜撰ノなり。其ノ古ノ說ハ。
知ル來ル者逆と云フ。言ハゆる。男ノ女ノの別ハ。文ノ躍スと越ス。
と云フ。說ハも有リ。と無ク。彼ノ章ノの文義ハ會スせざる者ハ。
妄ニ作ルる。と云フ。論ハゆる。猶モ。借途法ノの外ニも。本命ノ的
殺スの推法と云フ。始メ。種ノ。此ノ法ハ。有リ。と。皆ハ古ノの叶
はぬ無ク誓ヒの說ハ。取ル。小ノ足ラ。不レ審シ。思ハゆる。人ノ。
問ハゆる。來ル。○行年者從テ歲次而立テ。謂フ。之ノ。年立テ。五行大義
の。年立テ者。即チ行年也。立テ者。住立テ。為シ義就テ。入リ。而論ハ。常行不息。故
謂フ。之ノ。行就歲而論。今之一歳年住ス於テ此。故謂フ。之ノ。立テ也。と有リ。
小據ル。説ハゆる。大義ハ。文意ハ。一歳年ハ。歲卦節卦也。
其年ハ。星辰ハ。旋建シ。小定海ニ。其ノ一歳ハ。小住立テる。

爲しと記せる書の多うるを、此推儲かく本卦と年卦と
 法を訛り傳ふし説と見えり。相交はれむ。人々生涯の年卦。各々八卦の定海る。蒙
 者れ免れ小。其諸卦の次第を示さむ也。尤如し。

○生乾命の人。純乾を本卦と爲る。尤の順小遊ぶ。

九三三 乾為 二二三 履 天沢 三三三 同人 四三三 无妄

五三三 天地 六三三 遯 天山 七三三 訟 天水 八三三 天風 始

○辰兌命の人。純兌を本卦とする。尤の順小遊ぶ。

九三三 兌為 二二三 萃 沢火 三三三 隨 雷 四三三 沢地 萃

五三三 沢山 六三三 困 沢水 七三三 大過 八三三 沢天 夫

○午離命の人。純離を本卦と爲る。尤の順小遊ぶ。

九三三 離為 二二三 噬嗑 火雷 三三三 晋 火地 四三三 旅 火山

五三三 未濟 六三三 鼎 火風 七三三 大有 八三三 睽 火沢

○未震命の人。純震を本卦とする。尤の順小遊ぶ。

九三三 震為 二二三 豫 雷地 三三三 小過 四三三 解 雷水

五三三 雷風 六三三 大壯 七三三 雷沢 八三三 豊 雷火

○酉坤命の人。純坤を本卦と爲る。尤の順小遊ぶ。

九三三 坤為 二二三 謙 地山 三三三 師 地水 四三三 升 地風

五三三 地天 六三三 臨 地沢 七三三 明夷 八三三 復 地雷

○戌艮命の人。純艮を本卦とする。尤の順小遊ぶ。

九三三 艮為 二二三 蒙 山水 三三三 山風 四三三 山天 大畜

五三三 山沢 六三三 山火 七三三 山雷 八三三 山地

○生子坎命の人尤純坎を本卦と志す。尤は順ふ遊ぶ。

九三三 坎為 二三三 水風 三三三 水天 四三三 水沢

五三三 既濟 六三三 水雷 七三三 水地 八三三 水山

○寅巽命の人尤純巽を本卦にして尤は順ふ遊ぶ。

一三三 巽為 二三三 風天 三三三 風沢 四三三 風火

五三三 益 六三三 風雷 七三三 風山 八三三 風水

斯れ如く八卦をみれば行周を畢るる本卦の復り。尚更
小周を交は依る也。環の端も如く。千歳の壽を保ふ
むも替るる也無し。是年命の推法なり。然し往年の事
を知むと欲ふ所

た。此を本戸く返し數する知也。天地定位。はる年命
章の數往者順とある所。既の註するが如し。はる年命
の卦と。一歳年の節卦と相交はる趣を上げ如く。人々各
各れ年命卦を十二支小拘はり交。八卦は並流る次第を
追ふ。容遊し移る交はる。一歳年の節々卦とは。其年と
主卦の節々主卦來るを相交はれ也。彼此互の主客異
なり。然るも其異なる我が年卦を也。一歳年の異なる
卦は小行遊るが故。自はるら小某卦を也。某卦の
之と云ふ変化の出来る義なり。此主客の義をくすんた
を辨ふ。其概畧也。譬ふ。乾命の人初歳を純乾の節が。
其生を卯年た立春より。春分前を四十六日の間を。

図に如く風天小畜形也。我が乾を以て小畜の行也。春
 分より立夏前まで乾の形也。乾を以て乾の之くなり。か
 乙次く小其年此節卦をこれ二歳の當卦を天沢履形也。
 遊ふ也と云ふも更なり。其辰年也。兌王の歳也。立春より春分前まで。風沢中孚
 形也。履を以て中孚の之也。春分より立夏前まで也。履
 を以て履の之くなり。然る其年此節卦を次々小みれ三
 歳の當卦也。天火同人形也。其己年海の兌王此年の也。
 節々此卦を前年小同り也。同人を以て之くが故也。判
 断小異あり。八卦を次第小遊び之く例也。此斯の如く小
 乙。是より環に端なるが如し。同じ卦も其來を判断の卦
 也。象徳の從むる判断の卦

小異ある也。尤傳小出する筮法より焦氏が易林形ど
 を能く知らむ易学者。誰も知る事なむ也。委く云
 は文。但しかくは言ずとも。猶る其意を得るべく所思也
 形む。人も有やせむと心元あり。図をる也と尤也如し。

は右に如く。八年の八卦を持たず其年次の節に於る
六十四卦を之れ之る本命の卦を立復れ也。九年の之
を。海に同様の判断を依ると云ふ。初八年を云ふも更
なり。各く生時の日辰に因りて運命性分を異あり。己の
年卦節卦を得るは。四易に世應。太一六神の動靜。五行の
生尅。干支の合衝。六甲に孤虚を異あり。是を以て同命の
發生するも。其判断あり。各々異なり。然るに九年の
して同卦の復る。千歳に及ぶと雖ども千変万化。其判
断は同じある有りと無きあり。越是ら此事ども其判断の
明を見るべし。悉く古昔の正
しむ證例ある事どもあり。

夫命者天之令。所受于帝也。命有三科。有壽命以保度。有遭命以
謫暴。有隨命以督行。壽命正命也。起九九八十一。行正无過者得
之。遭命者行正遇凶也。隨命者隨行為命也。聖人其德。智者循
其轍。長生久視。不以命制。則愚者悖慢。逆道。智者无所施其術。天
不殺也。故立三命。以無策所以使尊天一節也。

此條は春秋元命苞と。孝經援神契とに遺文を校合して記
せり。○好尚云ふ。此條始免小本文字。命有三科。有受命。以保
度。有遭命。以謫暴。有隨命。以督行。受命謂年壽也。遭命謂行善
而遇凶也。隨命謂隨其善惡而報之也。と作らばて注解をも
為らばし。其後小今挙る。本文を改免らばし。注を

為らむし。身返らむ。加也。其古き。俛小記して。視を古と
尤也如し。

此條也。古微書尔。奉ある。孝經援神契。採して載せり。度
を本尔。慶と有。尔て誤なり。今也。白虎通。小從。多を改め。班固
於受命。謂年壽也。と云。今り。以下也。注文と見え。り。班固
の白虎通。小も。命者何。謂也。人之壽也。天命已使生者也。命有
三科。以記驗。有壽命。以保度。有遭命。以遇暴。有隨命。以應行。壽
命者。上命也。遭命者。逢世。殘賊。若上逢乱君。下必災變。暴至天
絶人命也。隨命者。隨行為命。欲使民務。仁立義。無滔天。滔天則
司命舉過。言則以弊之。と見え。り。此也。例の如く。今の用れ
り。此也。熟讀する。小。共。小古説。此深切著明ある者なり。故今

二説を和會して。此を説のむ。有受命。以保度。也。受命。謂
年壽也。と言む。白虎通。小壽命者。上命也。と云。尔如く。此分
道。此時。小受。る。命數。此度。小至。り。終る。字。言ふ。援神契。小
る。ま。白虎通。小。寿。命。と。あり。此。大。同。音。小。を。其。人。大。易。九
て。誤。る。の。但。し。お。た。難。小。も。有。る。也。其。人。大。易。九
此。數。を。究。め。て。生。出。さ。る。由。縁。有。る。也。九。と。八。十。一。歳。を。以。て
本。命。此。壽。と。し。て。其。少。り。此。過。不。及。也。然。し。も。議。せ。ざる。古。昔
此。道。なり。是。を。以。て。神。真。此。道。也。八。十。一。歳。を。期。と。志。る。仙
去。を。欲。する。定。則。あり。此。を。志。豆。能。岩。屋。を。委。く。記
せ。む。也。今。更。○。有。遭。命。以。譴。暴。と。云。謂。行。善。而。遇。凶。也。と。云。む。
白。虎。通。小。遭。命。者。逢。世。殘。賊。若。上。逢。乱。君。下。必。災。變。暴。至。天。絶
人。命。也。と。云。る。如。く。君。こ。る。人。を。し。政。事。を。乱。す。無。道。此。行。ひ

過奪算隨所輕重故所奪有少也。凡人之受命得壽自有本數。所稟本多則紀算難盡而遲死。若所稟本少而所犯者多則紀算速盡而早斃。吾亦未能審此事之有無也。然天道邈遠鬼神難明。趙簡子秦穆公親受金策於上帝。有上地之明徵。山川草木井竈洿池猶皆有精氣。況天地為物之至大者。於理當有精神。有神則宜賞善而罰惡。但其體大而網疎。不必機發而響應耳。且有思合之。伊藤長胤曰。天道論小天之算。錙銖而必不至於謬。行而之重也。故福善禍淫之徵。試之于人。而或差。試之于天下。而未嘗差也。驗之于一時。而或違。驗之于萬世。而未嘗違也。老聃氏有知之。乃曰。天網恢恢。疎而不失。其試之于一人。驗之于一時。而或錯者。雖似為疎。而試之于天下。驗之于萬世。而不錯者。乃其所以為不失者也。人之見天道。何其局耶。一夫震于雷而斃。則曰。陰慝之報。觸天之怒。然世之

積惡大罪之人。未必皆殞於雷。而善人君子之罹禍者。間或有之。聖王之世。時有災孽。積善之曹。或罹慘禍。於是疑於天道之或差矣。何其見天道之小耶。と云牙已信了此言此如し。

好尚云。趙簡子秦穆公皆親受金策於上帝云々と云。史記趙世家。趙簡子疾。五日不知人。大夫皆懼。醫扁鵲視之。出

董安于問。韋昭曰。安于。簡子家臣。扁鵲曰。血脈治也。而何怪。在昔秦穆

公曾如此。七日而寤。寤之日。告公孫支。與子與曰。索隱曰。二

公孫支。我之帝所甚樂。吾所以久者。適有學也。帝告我。晉國將大亂。五世不安。其後將霸。未老而死。霸者之子。且合而國

男女無別。公孫支書而藏之。秦讖於是出矣。秦穆公が金策を上帝に受る。其地を有する事れと見えぬと。其

尤偶小記し漏せると見えたり。然れども有上地之明
徴と云ふと聞えむ。あま下小注ふ旨と合せ辨ふべし。帝
と云ふ即天帝の云。吾が伊邪那岐大神なり。あま山海經の
郭註も。墨子曰昔秦穆公有明德。上帝使勾芒賜之。壽十
九年。と言ふ事も見え。此子之所聞。今主君之疾與之同。不
出三月。疾必間。間必有言也。居二日半。簡子寤。語大夫曰。我
之帝所甚樂。與百神游於鈞天。廣樂九奏。萬舞不類。三代之
樂。其聲動人心。有一熊欲來援我。帝命我射之。中熊。熊死。又
有一羆來。我又射之。中羆。羆死。帝甚喜。賜我二笥。皆有副。吾
見兒在帝側。帝屬我一翟犬。曰。及而子之壯也。以賜之。帝告
我晉國且世衰。七世而亡。云々。董安于受言而書藏之。他日
簡子出。有人當道辟之。不去。從者怒。將刃之。當道者曰。吾欲

有謁於主君。從者以聞。簡子召之。曰。譖。吾有所見。子晰也。索隱曰。簡子見當道者。乃寤。曰。譖是故。吾前夢所見者。知其名曰子晰也。當道者曰。屏左右。願有謁。
簡子屏。入。當道者曰。主君之疾。臣在帝側。簡子曰。然。有之。子
之見我。我何為。當道者曰。帝令主君射熊與羆皆死。簡子曰。
是且何也。當道者曰。晉國且有大難。主君首之。帝令主君滅
二卿。夫熊與羆皆其祖也。正義曰。范氏中行氏之祖也。簡子曰。帝賜我二
笥。皆有副。何也。正義曰。副謂皆子姓也。當道者曰。主君之子將克二國。
於翟皆子姓也。正義曰。謂代及智氏也。簡子曰。吾見兒在帝側。帝屬我
一翟犬。曰。及而子之長。以賜之。夫兒何謂。以賜翟犬。當道者
曰。兒主君之子也。翟犬者代之先也。主君之子且必有代。云

云。簡子問其姓。而延之以官。當道者曰。臣野人。敢帝命耳。遂不見。簡子書藏之。府と見え。趙簡子が金策を受ありと云。此事を謂ふなり。當道者とて天帝の所使。儲まふ有。上地之明徴と云。秦本紀。繆公三十七年。用由余謀伐戎王。益國十二。開地千里。遂霸西戎。と見えあるが。其西戎の地名得ある事云ふと聞えあり。然思ひ合さる事。淮南子精神訓。胡王淫女樂之娛。而亡上地。高誘註。胡蓋西戎之君也。秦穆公欲伐之。先遺女樂以淫其志。其臣由余諫不從。去戎來適秦。秦伐戎。得其上地。上地美地也と有り。あ。趙簡子も其世小あ。范氏中行氏を滅せざる。此みゆ。果して其子襄子か至

て上帝の命せし如く代ま有。智氏も併せ韓魏も。もふ疆加。し趣あむ。其が中。上地も多し。事知らむあり。是を稚川翁が謂ゆる明徴なり。趙世家。知伯率韓魏攻趙。襄子懼。乃奔保晉陽。原過從。後。於王沃見。三人自帶。以上可見。自帶以下。不可見。與原過。竹二節。莫通。曰。為我。以是遺趙。毋郵。原過既至。以告襄子。襄子也。三月。丙戌。余將使女。反滅知氏。女亦立。我百邑。余將賜。林胡之地。襄子再拜受。三神之合。三國攻晉。陽歲餘。引汾水。灌其城。襄子懼。乃夜使相張孟同。私於韓魏。韓魏與合謀。以三月。丙戌。三國反滅知氏。共分其地。於是趙北有代。南有知氏。強於韓魏。遂祠三神於百邑。使原過主。霍泰山祠祀。有。所の神あるべし。あ。此等の事。予が所記。せる。抱朴子集證。ふも云。あ。を就て見るべし。はる。司命れあ。韻會小春秋。佐助期曰。司命天神名也。周禮

大宗伯司命註疏星傳云文昌宮第四曰司命也とあり春秋
文曜鉤小文昌宮為六府史記天官書小一曰上將二曰次將
三曰貴將四曰司命五曰司中六曰司祿禮記祭法司命曰鄭
玄註小司命主督察三命オトと見えし也然る小甘石星經
して司命此説別小司非司危司錄司命と云ふ四星の
四文出しして右各主天下壽命爵祿安泰危敗是非之事とあ
り孰れり是也説文解字小祀字を以豚祠司命漢律曰祠祀
る事を知らん説文解字小祀字を以豚祠司命漢律曰祠祀
司命と註せり古に祭法と聞ゆと他書小未見當ら然
事也我新撰字鏡小祀以祀祀司命也字年須比万豆利
事也とあり司命小字年須比とあり司命小字年須比言を當る
事也古史傳小云依之見古史傳小云依之見應劭風俗通司命此評
小周祀標燦司中司命文且也今民間獨祀司命耳云と云
見るべし後世小祿命此決と云ふが有る後世小祿命此決と云ふが有る此三科命

此古説モト基モトせる説ありと鑿説妄誕元と取る小足げ鑿説妄誕元と取る小足げ
あ也古微書小委く論するが如し然也と今その大畧抄然也と今その大畧抄
后三命一家而河上公實能言之沿及後世陶弘景有三命抄沿及後世陶弘景有三命抄
畧唐人習者頗衆而張一行來道茂李虛中咸積其書虛中之咸積其書虛中之
後惟徐子平尤造其間奧也然以甲子幹枝推人所生歲月展轉相配其數極于七百二十以七百二十之日時其數終于五
十一萬八千四百夫以天下之廣兆民之衆林而生者不可以
以數計日有十二時未必一時惟生一人也以此觀之同時生
者不少何其吉凶之不相同哉唐呂才叙祿命以為今亦有同
年同祿而貴賤懸殊共命共胎而壽夭更異此皆祿命不驗之
著明者也誠足以破其外若加祿命此説謬と為之
矣と云已信然言なり若加祿命此説謬と為之
大易を以無用の物なり人これ大易を取む祿命此妄
誕を取む王符が潜夫論天地閑闕有神民民神異業精
神通行有招召命有遭隨吉凶之期天難諶斯聖賢雖察不自

專故立卜筮以質神靈。孔子曰。君子將有行也。問焉而以言。其
受命如響。夫君子聞善則勸樂而進。聞惡則循省而改。无故安
靜而多福。小人聞善則懼而妄為。故狂躁而多禍。是故凡卜
筮者蓋所問吉凶之情。言興衰之期。令人修身慎行以迎福也
と云ふ字思ふ所し。

天地之道。貞觀者也。日月之道。貞明者也。天下之動。貞一者也。成
性存存。道義之門。善不積不足。以成名。惡不積不足。以滅身。小人
以小善為无益而弗為也。以小惡為无傷而弗去也。故惡積而不
可掩。罪大而不可解。積善之家。必有餘慶。積不善之家。必有餘殃。
臣弑其君。子弑其父。非一朝一夕之故。其所由來者漸矣。由辨之
不早辨也。

此章尤貞一者也と云、海云。繫辭下傳小採也。本書小貞一の
大行ぬき大剛と云、此大
古人も早く云ふ事なり。其下ハ八字尤。繫辭上傳小取也。善
不積と云々、不可解と云、海云。ま、下傳小採也。積善をり
下大文言傳小採也。○は天地之道云くと云。正義小貞

者正也一也。天地之道貞觀者也。謂天覆地載之道。以真正得
一。故其功可為物之所觀也。日月之道貞明者也。言日月照臨
之道。以真正得一而為明也。天下之動貞一者也。言天地日月
之外。天下萬事之動皆正乎純一也。若得於純一則所動遂其
性。若失於純一則所動乖其理。是天下之動得正在一也。老子は
小。天得一以清。地得一以寧。神得一以靈。谷得一以盈。萬物得
一以生。公王得一以天下之正。其致之也。一也。と有る。字旨と
為云云。説あり。猶下引。夫乾確然示人易矣者。此明天
く葛子此説あり見るべし。之得一。以其得一故乾確然而剛也。夫坤隤然示人簡矣者。此
明地之得一。以其得一故坤隤然而柔也。若乾不得一不確然
或有隤然則不能示人易矣。若坤不得一不隤然或有確然則

不能示人簡矣。と釋するを信う正義あり。然るも伊藤
此章此言老子と相類するも。老子は一を以て主と為し。
此篇を貞字以て主と為し。相同なり。と云ふ。貞は
一は義なる由を思は。抑貞一は道と。と神真は奥秘ある
ざる非説あり。抑扶桑太帝は所使。天真皇人の。黄帝小傳よりし。世小顯
はきて。道は玄旨を述る古書とも。此の本文及び老子は
書類を更なり。此義を開示せる真諾いと多あり。扶桑太帝
氏の別名なり。天真皇人。其所使のし。黄帝小傳。真一は道
を傳ふ。神真なり。此事を廣黄帝記及び抱朴子小所見
る。予が太古傳小取。委。此は我が成學に大要領小し
く註せる。字見る知る。有る。今も此概略を説著さむ。小。此第廿條小引ある老
子此語小。道之為物。惟恍惟惚。惚兮恍兮。其中有象。恍兮惚兮

其中有物。窈兮冥兮。其中有精。其精甚真。且有元。真一也。出
る原を示せ。諾あり。是より推川翁の書に吾聞之於先
有絳宮守一存真乃能通神と云む。此老子の
語を引きて。其中有物一之謂也と云ふ。又同書に天
得一以清。地得一以寧。神得一以靈。谷得一以盈。萬物得一以
生。公王得一以為天下之貞。其致之一也と言む。公王に諸本
正の作る本も有。其も悪あり。文子の九守篇に老
子曰。天地運而相通。萬物總而為一。能知一即無二之不知也。
不能知一即無一之能知也と有る。真一は大字贊せ。諾
あり。此は本文と同じ旨あり。淮南子の精神訓に文子の九
守篇を全く取むる。増補せる
說あり。合せ見て知ふ。子華子に六者衆有之宗也。道得之
謂大一。天得一之謂天。帝得一之謂帝。故曰一之變大矣。通字

一術無一之不知。昧乎一術無一之能知。是故五
者立於一。而萬物生焉。と有るも此意なり。老子黃
庭經に五行參差同根蒂。三五金氣其本一。子能守一萬事畢。
子自有之持無失。務成子註に一為大神。天地之根。人之本命。
子能知之。萬事自畢。人之有一。不知守也。と云ふ。人各
小真一分賦し有る。由を誨せる語あり。文子の一立而
小。吾道一以貫之。莊子の記曰。通於二而萬事畢。靈樞に所謂
守一勿失。萬物畢者也。鬼谷子の信心術守真一而不化。子華
子の大道有源。其源甚真。各具空洞云。故曰通於二萬事畢。
此之謂也。又云。此皆右の老子の語ども。祖とせる化
り。其て記曰と云む。所謂と云。故曰と云。此皆古語の據
ゆる由を明せる文に。其に黃庭經の事と聞えり。此に
推川翁も見らる。古書に。王義之が写せる本の写
しも傳ちり。老子の古書に疑ふ物あり。かく
己其真一はも。天地万物の祖宗のし。我人とも一分賦し

有ととも。老子の視之不見。聽之不聞。搏之不得。不可致詰。故混而為一。と有る如く。信小知。難く得難き道なり。然ととも。篤く信じて古より好む人。神典仙籍を兼學して。遂に其域をも悟り知る事なり。但し其道は。大原に。かう籍。小謂る。天之御中主。神をり出。凡と。予が古史傳と太古傳と。委く註し。其大畧を上のも往く云。凡れを。今更に云は。交然らむ其人體も。何處も安在を。と云ふ。遠き書を姑く除きて。近く葛子の書も。知らる。其に地真卷。余聞之。師云。道起於一。其貴無偶。各居一處。以象天地人。故曰三一也。上丹田。中丹田。下丹田也。上丹田と。頭腦をいむ。中丹田と。心と。先天真一の氣を藏むるは。以て九還七返の丹田の基なり。と云ふ義を取て。名けありと。先輩も既云。凡れが如し。九

可此三丹田真一。其事就て。博く諸書を参考して。委曲に記せる物有る也。此小に。かく甚く約めて抄せるなり。一能成金。生易。推歩寒暑。春得一。以發。夏得一。以長。秋得一。以收。冬得一。以藏。其大不可。以六合階。其小不可。以毫芒比也。天得一。以清。地得一。以寧。人得一。以生。神得一。以靈。金一。以流。山一。以峙。川一。以流。視之。不見。聽之。不聞。存之。則在。忘之。則亡。向之。則吉。背之。則凶。保之。則遐。祚固極。道術諸經。存思念作。可以却惡防失。之。則命。彫氣。窮。とも云ふ。身者有。數千法。若知守一之道。則一切除棄。此輩。故曰。能知一。則萬事畢者也。人能守一。則一亦能守。人知一。不難難在。於終矣。夫。子華子。小。仰而視之。玄在焉。俛而察之。玄在焉。旁行而後也。是故。玄無不在也。人能守玄。玄則守之。不能守玄。玄則舍之。と有る。依る。文あり。猶玄一。道守之。守法も。地真卷。就て見。能守一者。行萬里。入軍旅。涉大川。不須。上。日。擇時。

起工移徙入新屋舍。皆不復。堪輿星歷而不避太歲太會。將軍月建。煞耗之神。年命之忌。終不復。值殃咎也。先賢歷試有驗之道也。若、在、鬼、廟、之、中、山、林、之、下、大、疫、之、地、塚、墓、之、間、虎、狼、之、藪、蛇、虺、之、處、守、一、不、怠、衆、惡、遠、避、思、一、至、饑、一、與、之、糧、思、一、至、渴、一、與、之、漿、夫、長、生、僊、方、則、唯、有、金、丹、受、真、一、口、守、形、却、惡、則、獨、有、真、一、故、古、人、尤、重、也、と、も、云、予、已、訣皆有明文。軟白牲之血。以王相之日。受之。以白絹白銀為約。剋金契而命之。輕說妄傳。其神不行也。と有依る。知不足し。
上件地真卷の文也。今ちく小要と有る事のみを引直し。切めて抄せむ。本書は三分が一のも足りぬ。猶委くは本書の就る見るを。然れど本書の其蘊奥の口訣を漏せ。然るの其傳はやく皇國の傳は。由有りて吾が遠祖。平良文主より。世々千葉家の傳り來り。予も幸む。其訣を聞かざるを得。然るの予。往年京の物して。菅原長公朝臣より。天満宮の傳り給む。口訣も傳受せり。予は天下貞一無敵傳と稱して。我が先祖の所傳。小同じく。神眞の道。小對

ふ敵なく。成就せしむ。神法なるが。元より輕說妄傳の誠の嚴ゆる。古言ふも更なり。哀れ予や。其神傳て受む。も著迹の業のいと無して。其修行の怠り。今抑貞一あり。眞一のそけ。精を致め。けふ。悲しむ。抑貞一あり。眞一のそ稱ふ。前條のも云ふ如く。人々各々。天賦の錫はる。精神性命。其總名のして。能く養む。保ち守らむ。人々。誠の葛子の語。け如。神妙。ま見。は。凡道あり。是を以て。文子の。老子曰。天地之間。一人之身也。六合之内。一人之形也。故明於性者。天地不能齊也。審於符者。怪物不能惑也。とあり。人定あり。天小以て。老子も。天地不能齊也。と云。予。然れど。此道の眞字。知ざむ。人々。徒の能齊也。と云。予。然れど。此道の眞字。知ざむ。人々。徒の荒唐の言。け如く。や。聞成らむ。論語。形る。孔語の。天生。徳。於。予。以為。君子也。と有る。れど。皆。あ。ま。五。十。の。し。易。字。學。む。天。余。を。知。り。て。後。の。語。あ。る。ま。以。て。天。の。本。命。字。知。り。明。ら。め。其。字。

守不事此要領也。謂を悟るべし。天命やがて本命。本命や
かす精神性命也。一と云ふ即ち終名なるが故。上は引
く。黄庭經の務成子注云。一為木神。千金翼方なる老子の
天地之根。人之本命也。此云云。至凶中得凶中之吉。入惡中得惡中之
善。惡人行。動擇時。且至吉中。反得吉中之凶。入善中。反得善中
之惡。此皆自然之符也。とも見えざる。思む合を為し。○好尚
云ふ。成性云ふ。八字注解を闕きし。○善不積不足。以成
名。云くと云。二十四條の謂ゆる隨命に餘蘊を知ら。小人は
吾を欺む。天を欺く情状をも觀る。不足を語り。以て善
を積め。凡の名字成しめ。惡を積免。凡の身を滅ししむる者
を誰ぞ。幽小神あり。顯小人あり。春秋繁露。積善在身。猶長
を誰ぞ。幽小神あり。顯小人あり。日加益而人不知也。積惡在

身猶火之銷膏而人不知也。故小老子の語。勿謂闇昧神見
とあり。實此言也。如し。我形勿謂小語。鬼聞我聲。人為易善。人自報之。為會善。鬼神報
之。人為易惡。人自治之。人為會惡。鬼神治之。故天不欺人。示之
以影。地不欺人。示之以響。人生天地之氣中。動作喘息皆應於
天。為善為惡。天皆鑒之。と言ふ。老子の此語。千金翼方。雲
ある字再引。本に老子中。ある。稚川翁の語。余每見欺
誑天下。以規執理者。遲速皆受殃罰。天網雖疎。終不漏也。不知
天高聽卑。其後必受斯殃也。人自不能聞見神明。而神明之聞
見己之甚易也。此何異乎。在紗縵之外。不能察軒房之內。而肆
其倨慢。謂人之不見己。此亦如竊鐘振物。鏗然有聲。惡他人聞

之。因自掩其耳者之類也。と云るも同じ旨なり。然也。老子此語。小本於
くる事云ふも更なり。例の畧。此を本文の罪大而不可解
と有と。其大罪を解く。小道あり。下小註ふ。見るべし。○
積善之家云くと云。是より。かた随命に餘蘊を。知らざり。説れ
るが。尤傳ふ。禍福無門。唯人之所召。よ。鬼神非人実親。惟德
是依。故書曰。皇天無親。惟德是輔。と見也。

○好尚云、此より下皆註釈を缺きあるが。其大罪を解く
ふ道ありと謂ふも。こゝに就て思ふ。抱朴子微旨卷の
其有曾行諸惡事。後自改悔者。若曾枉然入。則當思救濟應
死之人。以解之。若妄取人財物。則當思施與貧困。以解之。若

以罪加入。則當思薦達賢人。以解之。皆一倍於所爲。則可使
受吉利。轉禍爲福之道也。能盡不犯之。則必延年益壽。學道
速成也。夫天高而聽卑。物無不鑒。行善不怠。必得吉報。羊公
積德布施。詣乎皓首。乃受天墜之金。蔡順至孝感。神應之。好尚
云。此下疑。郭巨然。子爲親。而獲鐵券之重賜。然善事難爲。惡
事易作。而愚人復以項託伯牛輩。謂天地之不能辨。臧否。而
不知彼。有外名者。未必有內行。有陽譽者。不能解陰罪。若以
薺麥之生。死。而疑陰陽之大氣。亦不足以致遠也。と有る也。
謂ゆる大罪を解く。由は教へり。因に此處に附
録せり。委くは本書に就て見るべし。

易與天地相準。故能彌綸天地之道。仰以觀於天文。俯以察於地理。是故知幽明之故。原始反終。是故知死生之說。精氣為物。遊魂為變。是故知鬼神之情狀。夫易聖人所以崇德而廣業也。知崇禮卑。崇效天。卑法地。天地設位。而易行乎其中矣。

此條大都繫辭上傳小採也。○好尚云。此章も初より鬼神之情狀と云ふ也。注解も闕き也。○夫易聖人云こといふ文義也。夫易法天聖人其徳を崇くし。業を廣むる所以也。物あり。心小易理を具され也。往と志を通せざる事なし。志徳を崇むる所以なり。身小易理を體せざる事なし。志を達せざる事なし。志業を廣むる所以なり。徳を崇むる

之智れ崇れ小因也。業の廣きを禮に卑れ小因る。知れ智字と作して
見し。智れ高明を尚ふ故に天の效を礼に謙卑を主ふ故に
地の法を然るを易に聖心に規矩有り。況に此道を學ぶ者
の於てをや。凡人を能く智崇らるる物に我を動かし。我
の志が為る屈し。礼に卑らるる物に己必ち人の傲して。人
己を憎む。斯れ如く。何れ縁して徳業を得むや。以上七回
説とも
折衷して。乃ち天地設位と云。天尊地卑は位の定まるる故
記せり。言ふ。是天地の體あり。易行乎其中矣と云。天地の尊卑一定
して。變化無窮の易は其間を行く。是變易の用有り。但し
此
易の體用は大畧なり。次々小説して
行く趣を視て。其委しき旨を知べし。

易與天地相似。故不違。知周乎万物。而道濟天下。故不過。帝行而
不流。樂天知命。故不憂。安土敦乎仁。故能愛。範圍天地之化。而
不過。曲成万物。而不遺。通乎晝夜之道。而知變故。神无方。而易无體。
夫易廣矣大矣。以言乎遠。則不禦。以言乎迺。則靜而正。以言乎天
地之間。則備矣。

此條も亦、繫辭上傳の採き也。○好尚云ふ。此章初爻より
无體といふまで。注解を闕きし也。○夫易廣矣云々と云。易
理の妙を贊せるゆへ。廣大受容せざる所なく。大を包括せ
ざる所なし。故に其遠なる言と云。諸を千古四海に推す。
禦止むる所なく。其近なる言と云。諸を身志事物に當る

靜正ありざる所あり。天地の間を言と死に事と物と小。此
理を備足せざる所なりしと云ふ所なり。或説小理極於无外故
近不禦者所謂彌綸也。靜正者所謂相似也。性具於一身故曰
備者所謂範圍也。と云ふも然る言なり。

